

コインの銘にみるデカポリス都市の性格

江添 誠

The Character of the Decapolis Cities as Seen in Coin Inscriptions

Makoto EZOE

トランス・ヨルダン地域には前1世紀よりローマの支配に与しながら発展をしたデカポリスという都市群が知られている。これらデカポリスの各都市で造幣され、前63年から後241年までの間に都市名が打刻されているコインを資料として、コインに刻まれた銘を整理、分析し、その銘の型式、内容の変化をローマの支配の進展と照らし合わせながら考察する。

それぞれの都市のコインの造幣時期や銘の内容をみると、ガダラやスキュトポリスのように帝政以前から造幣が始まり一貫してポンペイウス紀年を打刻するグループと、ゲラサやフィラデルフィアのように1世紀から造幣が始まりポンペイウス紀年をほとんど用いていないグループがある。これらの差異から、デカポリスをポンペイウスの東方遠征に関連とする政治的連合体であるとは考えにくい。さらにヨセフスはデカポリスという言葉を第1次ユダヤ戦争の記述の中でのみ用いている。このことからデカポリスはウェシパシアヌスへの陳情のために集められたギリシア系都市の代表団程度の結びつきでしかないと思われる。

キーワード：デカポリス、コイン、銘、トランス・ヨルダン、ポンペイウス紀年

The Decapolis is known today as a city-group located in the Transjordan region that developed side by side with Roman rule in the 1st century BCE. Each city produced coins minting the name of cities and eras. This study begins by organizing inscriptions on those coins and analyzes them. Then it tries to examine the inscription form and content in terms of the progress of Roman rule.

Following the analysis of both production era and inscriptions for each city, two groups appeared: one group started to produce coins before Principate and continued to punch the Pompeian era on them, such as Gadara and Scythopolis, while another started to produce coins after the 1st century CE and hardly employed the Pompeian era (i.e. Gerasa and Philadelphia). Based on this result, it is difficult to confirm the assumption that the Decapolis was the political group in connection with Pompey's campaign. Furthermore, Josephus only uses the word of the 'Decapolis' in his description about the First Jewish War. It shows us that the Decapolis merely had a loose affiliation of major Greek cities in order to petition to Vespasian.

Key-words: Decapolis, coin, inscription, Transjordan, Pompeian Era

はじめに

前63年に行われたグナエウス・ポンペイウス (Gnaeus Pompeius) による東方遠征によって東地中海地域にローマの介入がはじまる。この際にユダヤ人に対抗するかたちでギリシア系の諸都市がローマ側につき、それまでのユダヤ人支配から解放され、再建されたことがフラウィウス・ヨセフス (Flavius Josephus) によって伝えられている。これらギリシア系都市のうちトランス・ヨルダン地域 (Transjordan) ではデカポリス (Decapolis) と呼ばれる都

市群が存在したことが知られている。デカポリスはギリシア語のデカ (Δεκα=10) とポリス (Πολις=都市) から成る言葉で、字義的には「10の都市」を意味する。10の都市群はヨルダン川を軸に北はシリア・アラブ共和国の首都ダマスカス (Damascus)、南はヨルダン・ハシミテ王国の首都アンマン (Amman 古代名フィラデルフィア Philadelphia)、西はイスラエル国のベト・シャン (Beth Shean 古代名スキュトポリス Scythopolis)、東はカナタ (Canatha) に広がる地域に点在したと考えられている (図

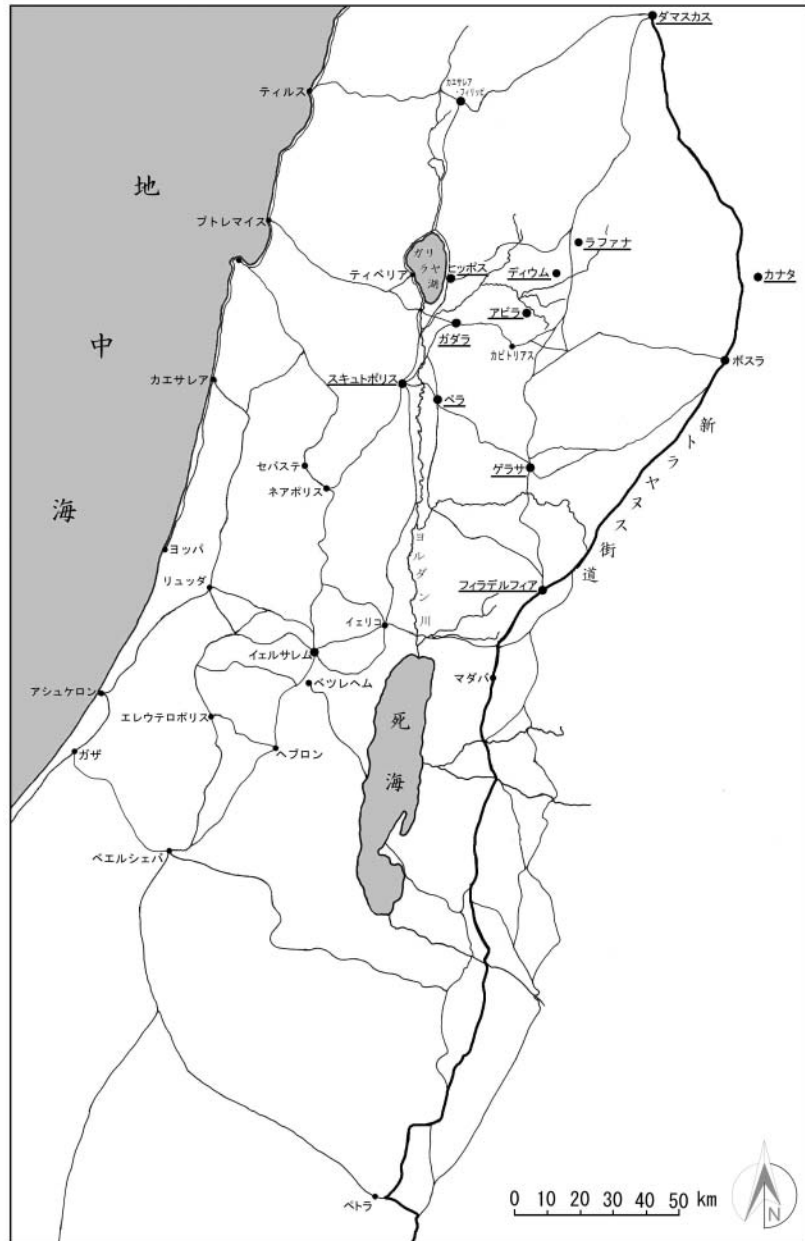


図1 トランス・ヨルダン地域の都市と主要街道
(筆者作成、下線の都市がデカポリス都市)

1 参照、下線があるものがデカポリスの都市とされているもの)。デカポリスを構成する都市について、後1世紀の博物学者プリニウス (Gaius Plinius Secundus) はダマスカス、フィラデルフィア、ラファナ (Raphana)、スキュトポリス、ガダラ (Gadara)、ヒッポス (Hippos)、ディオ (Dion)、ペラ (Pella)、ゲラサ (Gerasa)、カナタを挙げているが、すでにプリニウスの時代に、どの都市がデカポリスに数えられるのかが定かでないことも述べている¹⁾。研究者によってはこの他に、アビラ (Abila) やカピトリアス (Capitolias) を含める場合もある。

本稿は前63年から後241年までの間にこれらデカポリスの各都市で造幣され、都市名が打刻されているコインを

資料とし、コインに刻まれた銘を整理、分析し、その銘の型式、内容の変化がどのような状況で起こったのか、また、その変化にどのような都市の意図が見られるのかについて検討し、デカポリスという都市のまとまりとローマの属州支配との関係について考察する。

1. デカポリスのコインと先行研究

本稿で資料として用いるデカポリス都市のコインは、打ち型 (ダイス) を使って銘や図像を打刻する方法で造幣されており、鑄造貨幣のようにコインの大きさ・重さは一定ではない。また同一の刻印であっても重さ・大きさが異なる場合もある。これらのコインは、発掘調査によって検出

されたものというよりはむしろ古銭収集のような形で研究機関や博物館に集められたものが多く、発掘場所や発掘地区の情報ほとんど失われている。また、近年の発掘報告書においても出土地点を明確に記しているものはなく、コインと出土地点との相関関係を考えることは難しい。さらに同一のものと考えられるコインは十枚以下のものがほとんどで、時代やコイン毎の流通量などの傾向を考えるには少なすぎるため、数量的な議論も不可能である。しかしながら、コインそのものは100年以上の年月をかけて集積されたものであり、この10年間の発掘調査で見つかるコインの種類はそれまでの集成の中ですで見られるもので、数量的な増加が多少あっても種類が増加することはほとんどない。従って、銘や図像などコインそのものが内包している情報をその種類や年代と照らし合わせて比較検討することは可能であると考えられる。

デカポリスのコインの研究は、エルサレムにあるフランシスコ修道会聖書博物館 (The Franciscan Biblical Museum in Jerusalem) の学芸員であった A. スパイカーマン (Spijkerman) が博物館の所蔵していたコレクションを整理したものを彼の死後、M. ピッチリッロ (Piccirillo) が編集し、出版したものに始まる (Spijkerman 1978)。デカポリスとその他の属州アラビアの都市のコインについて、都市ごとにコインの大きさや銘を皇帝の年代別に列記したカタログ的な研究である。イスラエル博物館の学芸員の Y. メショレル (Meshorer) もまた、博物館のコイン・コレクションを各都市の概説とともに整理している (Meshorer 1985)。これら二つの研究がデカポリスのコインに関する基礎的な研究であり、本稿の資料の土台となっている。近年では、コインの図像学的な研究もあり (Lichtenberger 2003)、都市毎の図像の違いが都市の性格とどのような関係にあるかを議論している。スキュトポリスのコインについてのみ図像や銘などを総合的に検討した研究 (Barkay 2003) が行われているが、デカポリス都市のそれぞれのコインの銘を比較検討した研究はなされていない。

2. デカポリスをめぐる議論

プリニウスなどの一次文献史料や碑文史料の中に、デカポリスが何であるのかについての具体的な記述は残されていない。デカポリスというギリシア語が示すように、これらの都市群はヘレニズム時代以降にギリシア文化を背景とした人々によって建設され、ローマ時代以降、交易ルート上に位置する利点を最大に生かしながら発展したと一般的には考えられているが、都市間の結びつきについては、それをうかがわせる史料が欠如している。本章ではコインの分析に入る前に、デカポリスとはどのようなものであったのかについて、これまでに行われてきた議論をまとめてお

きたい。

研究者たちによって19世紀末以来、デカポリスはある種の連盟や連合といった互いに政治的に結びついた集合体であると考えられてきた。この考えを最初に示したのは G.A. スミス (Smith) で、デカポリスは「ヨルダンの東西地域でユダヤ人の勢力に対抗するためのギリシア諸都市の連合」であるとしている (Smith 1972 :399)。この見解は20世紀に入っても、F. M. アベル (Abel 1967 :2. 146)、C. H. クレーリング (Kraeling)、A. H. M. ジョーンズ (Jones 1936: 34)、M. アヴィ＝ヨナ (Avi-Yonah) といった研究者たちによって、支持され続けた。この都市連合説は、これらの都市群の多くが、ポンペイウスの東方遠征によるユダヤ人支配からの解放年 (前 64/63 年) を顕彰したポンペイウス紀年をコインの年代に用いていることが土台になっているが、前述の研究者たちの一部はデカポリスが都市連合であることを示す論拠が欠如していることを認めている。クレーリングは、「この連合の性質や目的が何であるかはその形成時期と同様に不確かなままである」と述べている (Kraeling 1938: 34)。アヴィ＝ヨナもまた「その組織について実際的なことは何も知らないし、その参加資格についてもほとんど知らない」ことを認めている (Avi-Yonah 1979: 81)。

この都市連合説に初めて異議を唱えたのは T. パーカー (Parker) である。彼は文献史料を検討した上で、連盟や連合といった言葉がデカポリスとともに用いられている箇所はないことを指摘した。そして、マルコの福音書7章31節にみられる「デカポリス地方 (των ὀρειων Δεκαπολιεως)」という表現やプリニウスの「デカポリス地域 (Decapolitana regio)」といった表現から、デカポリスは「南シリアからパレスチナ北東部において成員となった都市の領地によって構成される地理的領域」であるとしている。またポンペイウス紀年についてもデカポリス都市のみに用いられるものでないこと²⁾、コインの銘にデカポリスという言葉が表れないことから、デカポリスの連盟的な性格を決定付けるものではないとしている (Parker 1975: 439-440)。

これに対し、B. イサック (Issac) はマデュトス (Madytos) で見つかった碑文にデカポリスにおいて職務の任命を受けた騎士級の官吏が言及されていることから、デカポリスは少なくとも後67年以前はシリアに隣接した行政単位であったのではないかという可能性を示唆している (Issac 1981: 70-71)。

一方、D. グラフ (Graf) や P. ガティエ (Gatier) は、デカポリスの諸都市をシリアの属州総督の行政権の下に置くことによってハスモン朝 (Hasmonean) やナバテア王国 (Nabatea) の政治的支配を排除するために特別に組織され

たものであるとし、ローマがこれによってペトラ (Petra) からダマスカスへと抜ける主要交易路である「王の道」の北側半分を支配することができたと主張している (Graf 1986: 789-790; Gatiér 1988: 161-163)。

以上、デカポリスをめぐる先行研究をみてきたが根本的にデカポリスに関する史料が不足しているため、どの説も決定的なものにはなっていない。

3. 銘の整理

本稿では、デカポリス都市のうち、カナタ、ヒッポス、ガダラ、アビラ、ペラ、スキュトポリス、ゲラサ、フィラデルフィアの8都市で造幣されたコインを対象とする。デカポリスの一つと数えられるダマスカスで造幣されたコインは前312年を紀元とするセレウコス紀年を用いて年号が刻まれており、デカポリスのその他の都市で用いられる紀年法とは違うため、ここでは分析の対象から外すこととする。またラファナとディウムでは発掘調査が行われておらず都市の同定も確定していないため分析には含めていない。アビラはプリニウスによるデカポリスのリストからは外れているが、碑文などからデカポリス都市と考える研究者もおり³⁾、紀年法もデカポリスの他の都市と同じものを用いているので分析の対象に加えることとした。

本稿の分析対象としたコインの銘数はカナタが21、ヒッポスが46、ガダラが117、アビラが32、ペラが29、スキュトポリスが125、ゲラサが52、フィラデルフィアが75で、総数で497銘である。これら8都市のコインのうち完全に同一の銘をもつコインを1点に絞って整理を行った。

ローマ時代のデカポリス都市のコインは表面に主として皇帝の像とその名を示した銘が記され、裏面には神々の像や神殿、船といった図像とともに都市名と造幣年が記されている。

例えば、図9 (表1-30) の皇帝ネロ (Nero) の時代のコインは表面に「皇帝ネロ NEPON KAICAP」という銘とともにその肖像が刻まれている。裏面には女神トゥケー (Tyche) の像とともに「ガダラ ΓΑΔΑΡΑ」という都市名、ギリシア数字「ΑΔΡ」で造幣年が記されている。Αが1、Λが30、Ρが100をそれぞれ示し、造幣年は131年ということになる。

造幣年に関連して、コインの紀年法についても述べておきたい。図9の場合、ネロの即位年代や他のコインの年代と比較して計算すると、西暦67/68年 (西暦とローマ暦は年の初めがずれているためこのような表記になる) となり、刻まれている131年から差し引きするとコインの紀元は前64/63年となる。紀元となったこの年は前述したように、ポンペイウスによるギリシア都市のユダヤ支配からの解放

年であり、研究者の間ではこの年を元年とする紀年法を一般に「ポンペイウス紀年」と呼んでいる。デカポリス都市ではダマスカスを除いたすべての都市でこのポンペイウス紀年が用いられており、デカポリスの結びつきを考える上で、重要視されている要素の一つである⁴⁾。

これらの銘に関して、前述の四つの研究の巻末などに付されているリストを中心に発掘報告書の情報を加えて、都市毎にコインの表面、裏面に刻まれた銘を年代順にすべて表にまとめた。その上で、同一の内容の銘を一都市につき一つにしぼり、すべてのデカポリス都市の銘を一覧にしたものが、表1である。表1は左欄から通し番号、年代、皇帝および皇妃名、都市名、表面の銘、裏面の銘、出典となっている。年代で空白のものは裏面にポンペイウス紀年がないもの、皇帝・皇妃では表面に名前が刻まれていないことを示している。

さらに各都市のコインの時代分布と銘の特徴を比較照合するために作成したものが表2である。コインの造幣された前63年から後244年までを一年ごとに、表面は皇帝・皇妃名があるものを◎で、ないものを●で、裏面はポンペイウス紀年があるものを◎で、ないものを●で、ポンペイウス紀年があるものとないものが両方ある場合は○で整理を行った。裏面の●はポンペイウス紀年がないので年代が確定しないが、皇帝の銘などから推定される年代に挿入した。後述するが裏面にはポンペイウスとガビニウスを示す銘が現れるが、それについてはそれぞれPとGで表すことにする。また、ポンペイウス紀年と西暦のずれについては便宜的に後ろの年代 (例えば67/68年ならば68年) に統一して記号を入れることとする。

4. 銘の分析

ここではまず、表1を参照しながら、帝政初期のローマ史で一般的に用いられる王朝の時期区分に従って、便宜的に6つの時期に分けてコインの銘を分析する。その上で、表2を参照しながら、各都市のコインの時代分布と銘の特徴を分析していくことにする。

A. 各時期のコインの銘

(1) 帝政以前 (前63年から前27年)

まずはポンペイウス紀年元年にあたる西暦前64/63年のコインから見ていくことにする。元年のコインはガダラとカナタの二都市のものがある。まず、表1-2のガダラのコイン (図3) は、表面には銘がなく裏面にはポンペイウス紀年元年を示すLA (Lは紀年を表す数字の前に置かれる記号で、Aはギリシア数字の1である) とローマを示すPΩMHが刻まれている。都市名がないのにガダラのものとしている理由は、PΩMHの文字の下に三本の斜めに走

る筋が描かれているからである。この筋はアフラストン (Aphlaston) と呼ばれ、ガレー船の船尾を表している。後述するが後の時代のガダラのコインにもガレー船が描かれているものがあり、この図像はポンペイウスによる地中海の海賊討伐を顕彰したものと考えられている (Meshorer 1985: 81) ⁵⁾。

一方、表 1-1 のカナタのコイン (図 2) は三日月と星の図像とともに LA が刻まれている。メシヨレルはこれをカナタのものとしているがこれらの図像がどのようにカナタと結びつくかについては言及していない (Meshorer 1985: 76)。

この時期の特徴的なコインはスキュトポリスのものである。スキュトポリスの最初のコインと考えられている表 1-4 をみると表面には ΓΑ が、裏面には ΓΑΒΙΝΙΟΙΕΝΝΥΧΗ の銘が見られる。表面の ΓΑ は前 57 年から 54 年までの 4 年間、シリア属州総督であったアウルス・ガビニウス (Aulus Gabinius) を示しており、そこに刻まれている肖像もガビニウスであると考えられている。裏面は「ニュサ (Nysa) のガビニア人 (Gabinian) たちの」と読むことができる。ニュサとはスキュトポリスの別名であり、ガビニア (Gabinia) とは総督ガビニウスにちなんだこの都市の新しい名前である (図 4)。表 1-5 および 6 も刻まれ方は違うが同一の内容を表している (図 5、図 6)。研究者によっては最後の文字 H はギリシア数字でありポンペイウス紀年 8 年 (前 57/56 年) を示すと考えている。表 1-9 はそれぞれ ΓΑ がガビニウス、NV がニュサ、ΙΘ がポンペイウス紀年 19 年を示しているが、ΙΘ を ΛΘ と考えてポンペイウス紀年 9 年 (前 56/55 年) と考える研究者もいる (Barkay 1994-99: 54-59, 2003: 35-39, 図 7)。ちなみに都市の銘は基本的には複数属格で記されており、「～人たちのコイン」という意味になる。

その他のコインについてはガダラとヒッポスのものがあるが、表面には銘は刻まれず、裏面に都市名とポンペイウス紀年が刻まれている。この時期のコインは元年のものを除き、同じ年に複数の都市でコインが造幣されることはない。

(2) ユリウス・クラウディウス朝期 (Julio-Claudian Dynasty, 前 27 年から後 68 年)

ローマの初代皇帝アウグストゥス (Augustus) のコインは皇帝に即位する 3 年前の前 31/30 年にガダラで造幣されている (表 1-15, 図 8)。このコインの表面には ΣΕΒΑΣΤΩ ΚΑΙΣΑΡΙ の銘がみられる。ΣΕΒΑΣΤΩ (セバストゥス) はオクタヴィアヌス (Octavianus) が元老院から贈られたアウグストゥス (尊厳なる者) という尊称のギリシア語であるが、この尊称が贈られたのは前 27 年のこ

とで、ポンペイウス紀年 (LAA=34 年) で考えるならばこのコインの造幣年はそれよりも 3 年ほど早い。この問題について A. シュタイン (Stein) は、このコインの紀年法は前 31 年のアクティウム (Actium) の海戦の勝利を記念したアクティウム紀年であり、この年を元年とするとこのコインの造幣年は後 3/4 年であるとしている (Stein 1990: 27-28)。

この次に造幣されるのは 2 代皇帝ティベリウス (Tiberius) の治世中頃の後 28/29 年で、同じくガダラで作られている。表面には皇帝名と皇帝の称号 ΚΑΙΣΑΡΙ が、裏面には都市名とポンペイウス紀年が記されている。

カリグラの治世下の 37/38 年から 40/41 年の 4 年間はガダラ、カナタ、スキュトポリス、ガダラの順番で一年毎に違う都市でコインが造幣されている。この時期のコインはまだ銘の型式が整っていないことが見て取れる。37/38 年および 40/41 年のガダラのコインは表面にも紀年を表す L の銘が見られる。カナタのコインは表面には銘は見られない。スキュトポリスでは 39/40 年のものに二種類の銘が見られる。皇帝名の示し方はガイウス (Gaius) を示す ΓΑΙΟΥ の銘とセバストゥスの銘とが見られる。また、セバストゥスの銘とともにポンペイウス紀年が表面に刻まれている。この時期から裏面にはニュサだけでなくスキュトポリスの銘も見られるようになる。

クラウディウスの治世下でも、同じ年に複数の都市でコインが作られることはなく、41/42 年にスキュトポリス、44/45 年にガダラ、49/50 年からの 3 年間はカナタ、ガダラ、スキュトポリスの順で造幣されている。銘についてはカリグラのものと同様の混乱が続いている。41/42 年のスキュトポリスのコインは銘に一切の省略がない。

ネロの治世下の 67/68 年はヒッポス、ガダラ、ゲラサの 3 都市で同時に造幣が行われている。ヒッポスのものには裏面にアンティオキア (Antiochia) という都市の別名が出てきている。ゲラサではこの年に初めてコインが造幣されている。

(3) フラウィウス朝期 (Flavian Dynasty, 69 年から 96 年)

71/72 年のガダラではウェスパシヤヌス (Vespasianus) とティトゥス (Titus) の二種類の銘が見られる。ティトゥスはこの時点では皇帝ではないが、銘の上では皇帝と同様に扱われている。

ティトゥスの銘が刻まれたヒッポスのコイン (表 1-37, 図 10) では、新たに ΑΥΤΟ の銘が見られるようになる。これはラテン語のインペラートル (Imperator) に当たるギリシア語アウトクラートル (Αυτοκρατωρ) でカエサルとともに皇帝を示す称号となっている。

ウェスパシヤヌスの治世最後の年の 78/79 年にフィラデ

ルフィアでコインが作られ始めるようになる。しかし銘は表面に都市名のみで、裏面は「年」という意味の ΕΤΟΥΣ とポンペイウス紀年が刻まれており、これまでに見られない型式である。

80/81年はティトゥスの死によってドミティアヌス(Domitianus)へと帝位が移った年であるが、フィラデルフィアでは三種類の銘がみられる。まずは前年と同様の表面が都市名で裏面が年号だけのものである。二つ目は表面にティトゥスの銘が刻まれたもので全く銘の省略がなく、裏面の都市名も省略はない。3つ目は表面にドミティアヌスのものでアウトクラトールの称号がないが、他は2つ目のティトゥスのものと同様に省略なしで銘は刻まれている。

82/83年はカナタとベラの二都市で造幣されているが、銘についてはほとんど省略もなく、95/96年のカナタのものも同様である。

ドミティアヌスの銘が刻まれたとされるヒッポスのコインをスパイクマンは二種類挙げているが、1つは表面の銘の意味が全く不明でおそらく刻まれた肖像からドミティアヌスとしているもの(表1-46; Spijkerman 1978: 170-171、図11)で、もう1つはドミティアヌスの名がはっきりと記されたもの(表1-47、図12)である。ともに裏面に都市名はあるもののポンペイウス紀年はない。

(4) 五賢帝期(96年から193年)

五賢帝の最初の二人、ネルヴァ(Nerva)とトラヤヌス(Trajanus)の名を記したコインはデカポリスのいずれの都市からも見つかっていない。

ハドリアヌス(Hadrianus)のコインはフィラデルフィアとゲラサで造幣されている。フィラデルフィアのもの、表面は「皇帝ハドリアヌス・セバストゥス」と定型の銘であるが、裏面は二種類の銘が見られる。表1-49のものは都市名の ΦΙΛΑΔΕΛΦΕΩΝ のあとに ΚΟΙΛΗΚΚΥΡΙΑΚ という銘が初めて出てくる(図13)。この銘はコイレ・シリア(コエレ・シリア Coele-Syria)、ギリシア語で「くぼんだシリア」という意味の言葉でシリア南部のことを示している。この後のコインの銘に KC、KCVNP または KOICY などのさまざまな略号が出てくるが、デカポリスの点在した地域を含む地理的な呼称としてこの言葉は使われている。もう1つ(表1-50、図14)の銘には女神トゥケーを示す ΤΥΧΗ が見られる。

ゲラサ(表1-51、図15)のコインの表面には、ΔΙ という銘が見られる。A. リヒテンバーガー(Lichtenberger)はこの銘をハドリアヌスの治世14年(西暦131/132年)を示すギリシア数字であるとしている(Lichtenberger 2003: 453)。このような紀年法はデカポリスのコインの中で唯一

この年のゲラサのものにしか見られない。裏面にはトゥケーの他に女神アルテミス(Artemis)の銘と都市名が刻まれているが、当然のことながらポンペイウス紀年は見られない。

アントニヌス・ピウス(Antoninus Pius)の治世下では、ヒッポス、ガダラ、スキュトポリス、フィラデルフィアでコインが造幣されているが、ガダラのもの以外はポンペイウス紀年が使われていない。ガダラでは159/160年にアントニヌス・ピウス、マルクス・アウレリウス(Marcus Aurelius)、ルキウス・ウェルス(Lucius Verus)の三人それぞれのコインを造幣している。この時からガダラのコインの裏面に見られるようになった銘が ΠΟ である。これは後のコイン(表1-113、図22)に省略されずに ΠΟΜΠΗΙΕΩΝ と刻まれていることから分かるように、ポンペイウスの名前を示しており、ガダラにのみ見られる。また I・A・A・Γ という銘があるが、これは初めの I・A が「神聖なる都市の Ιερας Ασυλου」を、A・Γ が「アレクサンドロス(Alexandros)の子孫の Αλεξανδρου Γενεας」を示している。さらに K・CY という銘でコイレ・シリアも記されている。翌年のコイン(表1-59、図16)の裏面にはガレー船のモチーフとともに ΝΑΥΜΑ の銘が刻まれている。これはガリラヤ湖で行われた模擬海戦(ナウマキα Ναυμαχία)のことを示している。さらに次の161/162年にはマルクス・アウレリウスの皇妃ファウスティナ(Faustina)のコインも造幣されている。この年からはアビラも造幣を始めている。アビラもコインの裏面に CEΛΕΥΚ という銘で都市の別称セレウキア(Seleucia)を記している(表1-70、図17)。

フィラデルフィアではハドリアヌス以降はマルクス・アウレリウス治世下の164/165年と176/177年にのみポンペイウス紀年の使用が確認できる。しかし銘の型式はドミティアヌス治世下のものと同様に表面に都市名とコイレ・シリア、裏面は「年」とギリシア数字のみが記されている。皇帝名を表面に記したのものにはポンペイウス紀年は最後まで見られない。裏面の銘には ΗΡΑΚΛΕΙΩ ΑΡΜΑ(表1-83、図18)と ΘΕΑΑΚΤΕΡΙΑ(表1-84、図19)が加わり、それぞれ「ヘラクレス(Heracles)の馬車」「女神アステリア(Asteria)」を示している。

マルクス・アウレリウスからカラカラ(Caracalla)までゲラサではポンペイウス紀年が使用されない。マルクス・アウレリウスのコインの裏面には新たに ANTΩ ΠΡ ΧΡ TW ΠΡ ΓΕ という銘が現れる(表1-100、図20)。これは「クリュソロアス(Chrysorroas 金の川)およびゲラサのアンティオキア」と読むことができ、ゲラサを流れるクリュソロアス川(これは同時に川の神も示している)と都市の別称アンティオキアが都市のアイデンティティになって

いることが分かる。

スキュトポリスも都市を形容する単語がいくつか出てくるが、それらがすべてそろっているものが、マルクス・アウレリウス治世下（175/176年）のコンモドゥス（Commodus）のコインである（表1-109、図21）。省略を補った銘は(N) VC (AEWN)・T (WN)・CKVΘ (ΟΠΟΛΙΤWN)・T (HC)・IEP (AC)・AVC (ΑOV)・T (HC)・CVP (IAC)・EA (ΑΗΙΔOC)・ΠO (EWC) ΘACとなり、「ニュサおよびスキュトポリスの人々の、神聖なる都市でシリアにあるギリシア都市の、239年」という意味になる（Barkay 2003: 66）。

コンモドゥス治世下（183/184年）のペラのコイン（表1-116、図23）にはΦΙΛΙΠΠ・Τ・Κ・ΠΕΛΛΑΙΩΝ ΝΥΜΦ Κ ΕΛ ΕΤΟΣΜCという銘で都市を形容しているがそこには、都市の別名フィリップポリス（Philippopolis）、ニユンファエウム（Nymphaeum）、ギリシア都市といった単語が見られる。

190/191年のカナタのコインには、ΓΑΒΕΙΝという銘で前1世紀のシリア総督ガビニウス（Gabinius）の名前が記されている。

(5) セウエルス朝期（Severan Dynasty, 193年から235年）

セプティミウス・セウエルス（Septimius Severus）の治世は193年から211年であるが、この期間に妻のユリア・ドムナ（Julia Domna）、息子のカラカラとゲタ（Geta）のコインも造幣されている。この時期に出てくる今までにない銘はゲラサのもの（表1-155、図24）だけで、ΑΛΕΞ ΜΑΚ ΚΤΙ ΓΕΡΑCと記されており、「マケドニア（Macedonia）のアレクサンドロス、ゲラサの創設者」という意味である。カラカラ治世下の215年からエラガバルス（Elagabalus）が暗殺される222年までの間は、デカポリスの都市の中で最も高い密度でコインが造幣されており、エラガバルスの治世下では、ここにあげた8つの都市すべてのものを見ることができる。この時期のヒッポスのもの（表1-179、図25）にはゼウス（Zeus）とアロテシオス（Arotesios）という銘が新たに見られる。アロテシオスとは豊穡を示す言葉で、おそらくは地母神であるゼウスの妻ヘラ（Hera）を指していると思われる。

(6) セウエルス朝期以降（235年から241年）

セウエルス朝以降は、ゴルディアヌス3世（Gordianus）治世下の239/240年にガダラで、240/241年にガダラとスキュトポリスでコインが造幣されているが、銘に新たな型式のものは見られない。

B. コインの分布と都市ごとの特徴

ここでは、表2で整理したものを参照しながら、各都市のコインの時代分布と銘の特徴を比較しながら分析してみ

たい。

表2で分析項目として挙げたのは、表面に刻まれた皇帝名の銘と裏面のポンペイウス紀年の有無である。それぞれある場合は◎、無い場合を●、ある場合とない場合が両方あるものを○としている。したがって◎が多いほど、コインの銘の要素が揃っており、型式を順守していると考えられる。

まず各都市のコインの時代分布をみると、ガダラとスキュトポリスでは共和政末期から造幣が始まりコンスタントに造幣が行われていることが分かる。とりわけガダラは帝政に入って皇帝名が使われるようになると表面の皇帝名、裏面のポンペイウス紀年ともにすべて◎であり、完全にその型式を順守していることが分かる。スキュトポリスも160年のコインを除くとほぼ◎が続き、型式を順守しているといつてよい。アビラとペラは造幣の開始がマルクス＝アウレリウス治世下以降であるけれども、ほぼ◎が揃い、銘の型式は順守されている。一方、カナタとヒッポスは時代分布もまばらで型式も一定ではない。

ガダラ、スキュトポリスと完全な対照をなしているのがゲラサとフィラデルフィアである。この2都市は共和政末期には造幣がなく、ポンペイウス紀年の使用率も極めて低い。詳細にみると、ゲラサはポンペイウス紀年が見られるのは68年と219年のみで、それ以外はすべて●で、ポンペイウス紀年の使用が見られず、表面裏面ともに◎になることはない。フィラデルフィアは、79年、81年、120年、165年、177年にポンペイウス紀年の使用が見られるものの、81年と120年以外は皇帝名が刻まれていない。全体でみるとポンペイウス紀年の使用の割合は低い。フィラデルフィアもゲラサ同様、表面裏面ともに◎になることはない。

その一方で、ガダラでは全体的にコインの造幣が多くなるマルクス＝アウレリウス治世下以降、ポンペイウス紀年のみならずポンペイウスそのものを示す銘を一貫して刻んでいることが分かる。

このようにコインの銘の状況を都市ごとに比較してみると、銘の性格の上で、ガダラ、スキュトポリスのグループとゲラサ、フィラデルフィアのグループとに分かれており、デカポリス都市と呼ばれている都市の間に差異があることが確認できる。

5. デカポリス都市の変遷とコインの銘

5章では、4章で分析したこれらの銘の変化をヨセフスなど文献史料にみられる各都市の状況と照らし合せて、4章のAと同じ時期区分で検討していくことにする。

表1 デカポリス都市のコインの銘

	年代	総督・皇帝・皇妃	都市名	表面	裏面	出典
1	64/63 BCE		カナタ	銘なし	LA	M 206
2	64/63 BCE		ガダラ	銘なし	LA ΡΩΜΗ	S 2
3	59/58 BCE		ガダラ	銘なし	ΓΑΔΑ ΡΕΩΝ ΛC	L 29
4		ガビニウス	スキュトポリス	ΓΑ	ΓΑΒΙΝΙC ΟΙΕΝΝΥC Η	B 1
5		ガビニウス	スキュトポリス	ΓΑ	[ΓΑΒΙΝΕΩ]ΝΤΩΙΕΝΝΥ[Γ Η]	B 2
6		ガビニウス	スキュトポリス	ΓΑΒ	[ΤΩ]ΝΕΝΝΥC Η	B 4
7	55/54 BCE		スキュトポリス	銘なし	ΓΑΒ ΝΥ ΛΙ Λ	B 5
8	47/46 BCE		ガダラ	銘なし	ΓΑΔΑΡΕ ΩΝ ΛΙΗ	S 4
9	46/45 BCE		スキュトポリス	銘なし	ΓΑ ΝΥ ΙΘ	B 6
10	45/44 BCE		ガダラ	銘なし	ΓΑΔΑΡΕΩΝ ΛΚ	S 5
11	44/43 BCE		ガダラ	銘なし	ΓΑΔΑΡΕΩΝ Κ Α	S 6
12	41/40 BCE		ヒッボス	銘なし	ΗΠΠΗΝΩΝ ΛΓΚ	H 4
13	40/39 BCE		ガダラ	銘なし	ΓΑΔΑΡΕΩΝ ΛΕΚ	S 7
14	39/38 BCE		ヒッボス	銘なし	ΗΠΠΗΝΩΝ ΛCΚ	M 197
15	31/30 BCE	アウグストゥス	ガダラ	ΣΕΒΑΣΤΟ ΚΑΙCΑΡΙ	ΓΑΔΑΡΕΩΝ ΛΛΔ	S 9
16	28/29 CE	ティベリウス	ガダラ	ΤΙΒΕΡΙΩ ΚΑΙCΑΡΙ	ΓΑΔΑΡΕΙC ΛCΒ	S 11
17	37/38 CE	カリグラ	ガダラ	--ΑΙCΑΡΙΛΡΑ(?)	---ΑΡΑ ΛΡΑ	S 14
18	38/39 CE	カリグラ	カナタ	銘なし	ΚΑΝΑΤΑ ΛΑΡ	S 2
19	39/40 CE	カリグラ	スキュトポリス	[ΓΑΙΟΥ]ΚΑΙ [CΑΡΟC]	ΝΥCΑΗΚΑΙ [CΚΥΘΟ]ΠΟ[ΛΙ C] [ΛΓ] Ρ	B 7
20	39/40 CE	カリグラ	スキュトポリス	[C]ΕΒΑCΤΟΥ ΓΡ	CΚΥΘΟΠΟΛΕΙ [ΤΩΝ]	B 8
21	40/41 CE	カリグラ	ガダラ	--ΑCΤ- --ΑΙCΑΡΙΛΡΔ	ΓΑΔΑΡΑ ΛΡΔ	S 14
22	41/42 CE	クラウディウス	スキュトポリス	ΤΙΒΕΡΙΟCΚΛΑΥΔΙΟCΚΑΙCΑΡCΕ[ΒΑCΤΟC]	[Ν]Υ[Γ]ΑΙΕΩΝΤΩΝΚΑΙ [CΚΥΘΟ]ΠΟ[ΛΙ]ΤΩΝ ΛΕΙ Ρ	B 9
23	44/45 CE	クラウディウス	ガダラ	CΕΒΑCΤΟC	ΓΑΔΑΡΑ ΛΗΡ	S 16
24	49/50 CE	クラウディウス	カナタ	銘なし	ΚΑΝΑΘΗΝΩΝ ΒΙΡ	S 3
24	50/51 CE	クラウディウス	ガダラ	CΕΒΑCΤΩΚΑΙCΑΡΙ	ΓΑΔΑΡΑ ΛΔΙΡ	S 19
25	51/52 CE		スキュトポリス	Λ ΕΙΡ	ΝΥC ΑΙΕΩ ΝΤΩΝΚΑ ΙCΚΥΘΟΠΟ ΛΙΤΩ Ν	B 10
26	51/52 CE		スキュトポリス	銘なし	ΝΥCΗΚΑΙ CΚΥΘΟΠΟ ΛΙC ΛΕ ΙΡ	B 11
27	66/67 CE	ネロ	スキュトポリス	[ΝΕΡΩ]ΝΚΛΑΥΔΙΟCΚΑΙCΑΡCΕΒ[Ε]	ΝΥCΑ Λ ΡΑ	B 12
28	67/68 CE	ネロ	ヒッボス	ΝΕΡΩΝΚΛ ΑΥΔΙΟCΚΑΙCΑΡ	ΑΝΤΙΟΧΕΩΝΤΩΝΠΙ Ρ ΟC ΑΛ Ρ	S 1
29	67/68 CE	ネロ	ヒッボス	ΝΕΡΩΝ ΚΑΙCΑ Ρ	ΗΠΠΗΝΩΝ ΑΛ Ρ	S 2
30	67/68 CE	ネロ	ガダラ	ΝΕΡΟΝΚΑΙ CΑΡ	ΓΑΔΑΡΑ ΑΛ Ρ	L 30
31	67/68 CE	ネロ	ガダラ	ΝΕΡΩΝΚΑΙ CΑΡ	ΓΑΔΑΡΑ ΛΑΛ Ρ	S 22
32	67/68 CE		ゲラサ	銘なし	ΛΑΡ ΓΕΡΑ CΑ	L 110
33	67/68 CE	ネロ	ゲラサ	ΝΕΡ	ΛΑΡΓΕΡΑ ---Ν	S 3
34	71/72 CE	ウェスパシアヌス	ガダラ	ΟΥΕCΠΑCΙΑ Ν ΟΚΑΙCΑΡ	ΓΑΔΑΡΑ ΛΕΑΡ	S 26
35	71/72 CE	ティトゥス	ガダラ	ΤΙΤΟCΚΑΙ CΑΡ	ΓΑΔΑ ΡΕ ΩΝ ΛΕΑΡ	S 28
36	73/74 CE	ティトゥス	ガダラ	ΤΙΤΟCΚΑΙ CΑΡ	ΓΑΔΑ ΡΕ ΩΝ ΛΖΑΡ	S 30
37		ティトゥス	ヒッボス	ΑΥΤΟΤΙΤΟC ΚΑΙ	ΗΠΠΗ ΝΩΝ Α	S 3
38	78/79 CE		フィラデルフィア	ΑΔΕΛΦΕ ΩΝ	ΕΤ ΟΥC ΑΜΡ	L 116
39	80/81 CE		フィラデルフィア	ΦΙΛΑ[ΔΕΛ]ΦΕΩΝ	ΓΜΡ	L 129
40	80/81 CE		フィラデルフィア	ΦΙΛΑΔ ΕΛΦΕΩΝ	Γ Μ Λ Ρ	S 7
41	80/81 CE	ティトゥス	フィラデルフィア	ΑΥΤΟΚΡΑΤΩΡ ΤΙΤΟCΚΑΙCΑΡ	ΓΟΜΡ ΦΙΛΑΔΕΛΦΕΩΝ	S 9
42	80/81 CE	ドミティアヌス	フィラデルフィア	ΚΑΙCΑΡ ΔΟΜΙΤΙΑΝΟC	ΓΟΜΡ ΦΙΛΑΔΕΛΦΕΩΝ	S 10
43	82/83 CE	ドミティアヌス	カナタ	ΔΟΜΙΤΙ ΚΑΙCΑΡ	ΖΝΡ ΚΑΝΑΤΑ	S 4
44	82/83 CE	ドミティアヌス	ベラ	ΑΥΤΟΚΡΑΤΩΡ ΔΟΜΙΤΙΑΝΟC ΚΑΙCΑΡ	ΠΕΛΛΗΝΩ ΝΛ ΕΜΡ	S 3
45	95/96 CE	ドミティアヌス	カナタ	[ΔΟΜΙΤΙ] ΚΑΙCΑΡ	ΗΝΡ [ΚΑ]ΝΑΤΑ	S 5
46		ドミティアヌス	ヒッボス	? ΑΡ ΦΟΚΚΔ'ΑΡ Ο'C ΚΑΙΕΛ-	ΑΝ ΤΙΟΧΕ ΩΝ - ΡΟCΤΩΠΠ	S 4
47		ドミティアヌス	ヒッボス	ΔΟΜΙΤΙΑ ΚΑΙC	ΗΠΠΗΝ ΩΝ Α	S 5
48	119/120 CE	ハドリアヌス	フィラデルフィア	[-----]	ΦΙΛΑΔΕΛΦ [---ΚΟΙ?] [C]ΥΡ ΡΒΒ	L 119
49		ハドリアヌス	フィラデルフィア	ΑΥΤΟΚΡ·ΑΔΟΡΙΑΝΟC·CΕΒΑCΤΟC	ΦΙΛΑΔΕΛΦΕΩΝΚΟΙΛΗCΣΥΡΙΑC	S 11
50		ハドリアヌス	フィラデルフィア	ΑΥΤΟΚΡ·ΑΔΟΡΙΑΝΟC·CΕΒΑCΤΟC	ΤΥΧΗΦΙΛΑΔΕΛΦΕΩΝΚC	S 16
51	(131/132)	ハドリアヌス	ゲラサ	ΔΙ·ΑΥ·Κ·ΤΡΑ ΑΔΡΙΑΝΟC·CΕ	ΑΡΤΕΜΙC ΤΥΧΗ ΓΕΡΑCΩΝ	M 252
52	159/160 CE	アントニヌス・ピウス	ヒッボス	ΑΥΤΟΚΡ·ΚΥΡ· ΑΝΤΩΝΕΙΝΟC	ΑΝΤΙΟ· ΤΩ·ΠΡ·ΠΙ·ΤΗC·ΙΕΡ·Κ·ΑΥΛΟΥ	S 6
53		アントニヌス・ピウス	ガダラ	ΑΥΤΚΑΙCΑΝΤΩ ΝΕΙΝΟCΕΒΕΥC	ΠΟ·ΓΑΔΑΡ Ι·Α·Α·Γ Κ·CΥ ΓΚC	S 31
54		アントニヌス・ピウス	スキュトポリス	ΑΥΤΟΚ ΑΝΤΩΝΙΝΟ CΕΒ·ΕΥCΕ	ΝΥCΑΕΚΟ Ι CΥΡΙΑC·	B 15
55		アントニヌス・ピウス	フィラデルフィア	ΑΥΤΚΑΙCΑΡ ΑΝΤΩ ΝΕ ΙΝΟC	ΦΙΛΑΔΕΛ ΦΕΩΝΚΟΙΛ CΥΡΙΑC	S 17
56	159/160 CE	アントニヌス・ピウス	フィラデルフィア	ΑΥΤΚΑΙCΑΡ ΑΝΤΩ Ν ΕΙΝΟC	ΤΥΧΗΦΙΛ ΑΔΕΛΦΕΙΑC	S 18
57	159/160 CE	マルクス・アウレリウス	ガダラ	ΑΥΤΚΑΙCΜ[ΑΥΡ] ΑΝΤΩΝΕΙΝΟC	ΓΑΔΑ ΡΕΩΝ ΓΚC	S 37
58	160/161 CE	ルキウス・ウェルス	ガダラ	ΟΥΗΡΚΑΙCΑΡ CΕΒΥΙΟC	ΓΑΔΑΡΕΩΝ ΓΚC	S 50
59	160/161 CE	マルクス・アウレリウス	ガダラ	ΑΥΤΚΑΙCΜΑΥΡ ΑΝΤΩΝΕΙΝΟC	ΓΑΔΑΡΕΩΝ ΝΑΥΜΑ ΔΚC	L 48
60	160/161 CE	マルクス・アウレリウス	ガダラ	ΑΥΤΚΑΙCΜΑΥΡ ΑΝΤΩΝΕΙΝΟC	ΓΑΔΑΡΕΩΝ ΤΗCΚΑΤΑΙΓΥ ΝΑΥΜΑ ΔΚC	L 49
61	160/161 CE	M.アウレリウス & L.ウェルス	ガダラ	---ΑΝΤΩΝΕΙΝΟC ----ΟΥΗΡΟC-	ΠΟΓΑΔΑΡ ΙΑΑΓ (ΚCVP) ΔΚC	S 46
62	161/162 CE	ルキウス・ウェルス	ガダラ	ΑΥΤΚΑΙCΑΡΑ ΑΥΡΟΥΗΡΟC	ΓΑΔΑ ΡΕΩΝΔΚC	S 53
63	161/162 CE	マルクス・アウレリウス	ガダラ	ΑΥ Τ·ΚΑΙC·Μ·ΑΥΡ ΑΝΤΩΝΕΙΝΟC	ΠΟΜΓΑΔΑΡ ΙΑΑΓ ΚCVP ΕΚC	S 35
64	161/162 CE	M.アウレリウス & L.ウェルス	ガダラ	---ΚΑΙΟΥΗΡΟC-	ΠΟΜΓΑΔΑΡ ΚCVP ΕΚC	S 48
65	161/162 CE	ファウステイナ	ガダラ	ΦΑΥCΤΙΝΑ CΕΒΑCΤΗ	ΓΑΔΑΡΕΩΝ ΕΚC	S 49
66	161/162 CE	ルキウス・ウェルス	ガダラ	ΑΥΤΚΑΙCΑΡΑ ΑΥΡΟΥΗΡΟC	ΠΟΜΓΑ ΔΑΡ·ΕΚC	L 37
67		ルキウス・ウェルス	ガダラ	ΑΥΤΚΑΙCΑΡ ΛΑΥΡΟΥΗΡΟC	ΠΟΓΑΔΑΡΕΩΝ ΙΑΑΓ ΚCΥΡ ΕΚC	S 52
68	161/162 CE	マルクス・アウレリウス	アビラ	ΑΥΤ ΚΑΙ Μ ΑΥΡ ΑΝΤΩΝΙΝΟC	ΑΒΙΛΗΝΩΝ	M 215
69	161/162 CE	マルクス・アウレリウス	アビラ	ΑΥΤΚΑΙCΜ ΑΥΡΑΝΤΑΥΓ	CΕΑΒΙΛΗΝΩ ΝΙΑΑΓ ΚΟΙCΥ ΕΚC	S 1
70		ルキウス・ウェルス	アビラ	ΑΥΤ·ΚΑΙC·Α· ΑΥΡ·ΟΥΗΡ·ΑΥΓ	CΕΛΕΥΚ ΑΒΙΛΑ·ΕΚC	S 7

年代	総督・皇帝・皇妃	都市名	表面	裏面	出典	
71	162/163 CE	マルクス・アウレリウス	ガダラ	ΑΥΤΚΑΙCΜΑΥΡ ΑΝΤΩΝΕΙΝΟC	Π ΟΜΓΑΔΑ ΙΑΑΓ ΚCVP ϷΚC	S 36
72	162/163 CE	ルキウス・ウェルス	ガダラ	ΑΥΤΚΑΙCΑ ΑΥΡΟΥΗΡΟC	ΓΑΔΑ ΡΕΩΝϷΚC	S 56
73	162/163 CE	マルクス・アウレリウス	アビラ	ΑΥΤΚΑΙCΜ ΑΥΡΑΝΤΑΥΓ	CEΑΒΙΛΗΝΩΝΙΑΑΓ·ΚΟΙ·CΥϷ·ΚC	S 3
74	162/163 CE	ファウステイナ	アビラ	ΦΑΥCΤΕΙΝΑ CΕΒΑCΤΗ	CEΛΕVΚ ΑΒΙΑΑ SKC	M 211
75	162/163 CE	ルキウス・ウェルス	アビラ	ΑΥΤ ΚΑΙCΑΡ Α ΑΥΡ ΟΥΗΡΟC	CEΑΒΙΛΗΝΩΝΙΑΑΓΚΟΙCΥ SKC	M 212
76		マルクス・アウレリウス	スキュトボリス	[ΑΥΤ]ΚΑΙC·Μ·ΑΥ [ΑΝΤΩΝΙΝΟC]	ΝVCAΕΚΟΙ CΥΡΙΑC·	B 18a
77	162/163 CE	マルクス・アウレリウス	スキュトボリス	ΑΥΤ·ΚΑΙC·Λ·ΑΥ ΑΝΤΩΝΙΝΟC	ΝVCAΕΚΟΙCΥ ΡΙΕΡϷΚC	B 20
78	163/164 CE	マルクス・アウレリウス	スキュトボリス	ΑΥΤ·ΚΑΙC·Λ·ΑΥ ΑΝΤΩΝΙΝΟC	ΝV[C]Α[Ε]ΚΟΙ CΥΡΙΑC ΕΤ ΖΚC·	B 21a
79		ファウステイナ	スキュトボリス	ΦΑΥCΕΙΝΑ CΕΒΑCΤΗ	ΝVCAΕΚΟ ΙCΥΡΙΑC·	B 24
80		ルキウス・ウェルス	スキュトボリス	ΑΥΤΚΑΙCΑΥΡ ΑΥΡΟΒΗΑΥΓ	ΝVCAΕΩ ΚΟΙCΥΡΙ·	B 25a
81	163/164 CE	ルキウス・ウェルス	スキュトボリス	ΑΥΤΚΑΙCΑΥΡ ΑΥΡΟΒΗΑΥΓ	ΝVCAΕ ΚΟΙCΥΡ ΕΤ ΖΚC·	B 26
82		マルクス・アウレリウス	フィラデルフィア	ΑΥΤ·ΚΑΙC·Μ·ΑΥΡ ΑΝΤΩΝΙΝΟC	ΦΙΛΑΔΕΛΦΕΩΝ ΚΟΙΛΗCΥΡΙΑC	L 122
83		マルクス・アウレリウス	フィラデルフィア	ΑΥΤ ΚΑΙC Μ ΑΥΡ ΑΝΤΩΝΙΝΟC	ΦΙΛ ΚΟ CΥΡ ΗΡΑΚΛΕΙΩ ΑΡΜΑ	M 263
84		マルクス・アウレリウス	フィラデルフィア	ΑΥΤ·ΚΑΙC·Μ·ΑΥΡ·ΑΝΤΩΝΙΝΟC	ΦΙΛ·ΚΟΙ·CΥΡΙ·ΘΕΑΑCΤΕΡΙΑ	S 24
85		マルクス・アウレリウス & ルキウス	フィラデルフィア	ΑΥΤ·ΚΑΙ·Μ·ΑΥΡΗ·ΑΝΤΩΝ	ΗΡΑΚΛΗC ΦΙΛ ΚΟΙ ΩΝ CΥΡ	S 26
86		ルキウス・ウェルス	フィラデルフィア	ΑΥΤ·ΚΑΙCΑ ΑΥΡ·ΥΗΡΟC	ΦΙΛ·ΚΟΙCΥΡΙ·ΘΕΑΑCΤΕΡΙΑ	L 134
87		ルキウス・ウェルス	フィラデルフィア	ΑΥΤ·ΚΑΙC·Λ·ΑΥΡ·οΥΗΡΟC	ΦΙΛΑΔΕΛΦΕΩΝ ΚΟΙΛΗCΥΡΙΑC	S 27
88	164/165 CE		フィラデルフィア	ΦΙΛ·ΚΟΙ· CΥΡΙΑC	ΕΤΟΥC ΖΚC	M 257
89	165/166 CE	マルクス・アウレリウス	ヒッボス	ΑΥΤΚΑΙCΑΥΡ ΑΝΤΩΝΙΝΩΝ	ΑΝΤΙΟΧΠΡΙΠ ΙΕ Ρ ΑCΥΑΟC ΘΚC	S 8
90		マルクス・アウレリウス	ヒッボス	ΑΥΤΚΑΙCΜΑΥΡ ΑΝΤΩΝΕΙΝΟC	ΑΝΤ ΙΟΤΩΠΡΙΠΙΤΗCΙΕΡΚΑCΥΛΟΥ	S 9
91		ファウステイナ	ヒッボス	ΦΑΥCΤΕΙΝΑ CΕΒΑCΤΗ	ΑΝΤ ΠΡΙΠΙΕΡΑCΥΛ	S 12
92		ファウステイナ	ゲラサ	ΦΑΥCΤΕΙΝΑ CΕΒΑCΤΗ	ΑΡΤΕΜΙCΤΥΧΗΓΕΡΑCΩΝ	S 14
93		ルキウス・ウェルス	ヒッボス	ΑΥΤ ΚΑΑΥΡ ΟΥΗΡΟC	ΑΝΤ ΠΡ ΙΠ ΙΕΡ ΑCΥΛ	M 199
94	165/166 CE	ルキウス・ウェルス	ヒッボス	ΑΥΤΚΑΙCΑ ΑΥΡ ΟΥΗΡΟ	ΑΝΤΠ Ρ ΙΠ ΙΕΡΑCΥ ΘΚ C	S 16
95		ルキウス・ウェルス	ヒッボス	ΑΥΤΚΑΙCΑ Ρ ΑΑΥ Ρ ΟΥΗΡΟC	ΑΝΤΠ Ρ ΙΠ ΙΕΡ ΑCΥΛ	S 17
96	165/166 CE	ルキウス・ウェルス	ヒッボス	ΑΥΤΚΑΙCΑ ΑΥΡ ΟΥΗΡΟ	ΑΝΤΙΟΧΠ Ρ Ι ΠΙΕΡΑCΥ ΘΚC	S 18
97		ルキウス・ウェルス	ヒッボス	ΑΥΤΚΑΙΛΑΥ Ρ Η ΛΙΟCΟΥΗ Ρ ΟC	ΑΝΤ ΙΟΤΩΠ Ρ ΙΠΙΤΗCΙΕ Ρ ΚΑCΥΛΟΥ	S 19
98	166/167 CE	ルキウス・ウェルス	ヒッボス	ΑΥΤ ΚΑΑΥΡ ΟΥΗΡΟC	ΑΝΤ ΠΡ ΙΠ ΙΕΡΑC ΘΚC	M 202
99	166/167 CE	ルキウス・ウェルス	アビラ	ΑΥΤΚΑΙCΑΡΑ ΑΥΡΟΥΗΡΟC	CEΑΒΙΛΗΝΩ ΝΙΑΑΓΚΟΙCΥ ΛC	S 10
100		マルクス・アウレリウス	ゲラサ	ΑΥΤ ΚΑΙC Μ ΑΥΡ ΑΝΤΩ	ΑΝΤΩ ΠΡ ΧΡ ΤΩ ΠΡ ΓΕ	M 253
101		マルクス・アウレリウス	ゲラサ	ΑΥΤΚΑΙCΜΑ ΑΥΡΑΝΤΩ	ΑΡΤΕΜΙC ΤΥΧΗΓΕ---	S 8
102		ルキウス・ウェルス	ゲラサ	ΑΥΤΟΚΚΑΙCΑΡ ΛΟΥΚΙΟΒΗ	ΑΡΤΕΜΙCΤΥΧ ΗΓ	S 15
103		ルキウス・ウェルス	ゲラサ	ΑΥΤΟΚ·ΚΑΙCΑΡ ΛΟΥΚΙΟΒΗ	ΑΝ·ΤΩ·ΠΡ·ΧΡ·ΤΩ·ΠΡ·ΓΕ	S 16
104	173/174 CE	マルクス・アウレリウス	ガダラ	ΑΥ Τ·ΚΑΙC·Μ·ΑΥΡ ΑΝΤΩΝΕΙΝΟC	ΓΑΔΑΡ ΕΩΝΖΚC	S 41
105	175/176 CE	マルクス・アウレリウス	スキュトボリス	ΑΥ[Μ·ΑΥΡ·Α]ΝΤ [Ω]ΝΙΝΟ[CΑΥΓ]	ΝV[C]Α[Ε]CΚΥΤΙΕΡΑC·Τ·CΥΡ·ΕΛΠΟ ΘΑC·	B 22
106	175/176 CE	ルキッラ	スキュトボリス	ΛΟΥΚΙΑΛΑ ΑΥΓΟV[C]ΤΑ]	ΝVС·Τ·CΚ· Τ·ΕΙΤ·C·Ε·Π Θ ΛC	B 28
107		ルキッラ	ゲラサ	ΛΟΥΚΙΑΛΑ CΕΒΑCΤΗ	[ΑΡΤ]ΕΜΙCΤΥΧΗΓΕΡΑCΩΝ	S 19
108	176/177 CE		フィラデルフィア	ΦΙΛ·ΚΟΙ· CΥΡΙΑC	ΕΤΟΥC ΘΑC	M 258
109	175/176 CE	コンモドゥス	スキュトボリス	[ΑΥΡ]ΗΛΙΟC·ΚΟΜΟΔΟC·ΚΑΙCΑΡΓΕΡΜ·CΑΡΜ---	VС·Τ·CΚVΘ·Τ·ΙΕΡ·ΑVС·Τ·CΥΡ·ΕΛ·ΠΟΛ ΘΑC	B 29
110	177/178 CE	ルキッラ	ベラ	ΛΟΥΚΙΑΛΑ ΑΥΓΟVCTΑ	ΠΕΛΛΑΙΩΝ ΜC	M 248
111	177/178 CE	コンモドゥス	ベラ	ΑΥ·Κ·Λ·ΑΥΡ ΚΟΜΟΔΟC	ΠΕΛΛΑ Ι·ΩΝ Μ C	S 6
112	178/179 CE	コンモドゥス	ガダラ	ΑΥΤ Κ·Λ·ΑΥΡ ΚΟΜΜΟΔΟΝ	ΠΟ ΓΑΔΑ ΙΕ·ΑC ΑΓ·ΚC ΒΜC	M 220
113	179/180 CE	コンモドゥス	ガダラ	ΑΥΤ Κ Λ·ΑΥΡ ΚΟΜΜΟΔΟΝ	ΠΟΜΠ ΗΙΕΩΝ ΓΑΔΑΡΕΩΝ ΕΤ·ΓΜC	M 219
114	179/180 CE	クリスピナ	ガダラ	ΚΡΙCΠΙΝΑ CΕΒΑCΤΗ	ΓΑΔΑΡ ΕΩΝΓΜC	S 67
115	182/183 CE	コンモドゥス	スキュトボリス	ΑΥ[Κ]ΚΟΜΜΟ ΑΝΤΩΝΙΝΟV	ΝVСΚ ΙΕΡΑ ΑCΥΛ ϷΜC	B 33
116	183/184 CE	コンモドゥス	ベラ	ΑΥ·Κ Μ ΚΟΜΜΟΔΟC ΑΝΤΩΝΙΝΟC	ΦΙΛΠΙ·Τ·Κ·ΠΕΛΛΑΙΩΝ ΝΥΜΦ Κ ΕΛ ΕΤΟCΜC	M 250
117		コンモドゥス	ベラ	ΑΥ·Κ·Λ·ΚΟΜΜΟΔΟC ΑΝΤΩΝΕΙΝΟC	ΠΕΛ ΛΑ ΙΩΝ	S 7
118	183/184 CE	コンモドゥス	ベラ	ΑΥ·Κ·Μ·ΚΟΜΜΟΔΟC ΑΝΤΩΝΙΝΟC	ΦΙΛΠΙ·Τ·Κ·ΠΕΛΛΑΙΩΝΠΙ ΕΤΟϷΜC	S 9
119		コンモドゥス	ベラ	ΑΥΚΟΜΟ ΑΝΤΩΝΙΝΟ	ΠΕΛΛΑΙΩΝ ϷΜC	S 10
120	184/185 CE	コンモドゥス	ヒッボス	ΑΥΤ·ΚΑ·ΑΥ·ΑΝ·ΚΟΜ·ΑΝΤΩ	ΑΝΤΙΟΧΠΡ ΙΠΙΠΙΕΡΑCΥ ΗΜC	S 25
121		コンモドゥス	ヒッボス	ΑΥΤΚΜΑΥ ΚΟΜΑΝΤ	ΑΝΤ ΠΡΙΠΙ ΕΡΑCΥΛ	S 26
122		コンモドゥス	カナタ	--ΑΝΤΟ ΚΟΜ--	ΓΑΒΙΝ ΚΑΝΑΘΑ	M 207
123	185/186 CE	コンモドゥス	スキュトボリス	ΑΥΚΚΟΜΟΔΟΥ ΑΝΤΩΝΙΝΟΥ	ΝΥCΚΙΕ ΑCΥΘΜC·	B 37
124	187/188 CE	コンモドゥス	アビラ	ΑΥΤοΚΑΙC ΚΟΜΟΔΟC	CEΑΒΙΛΗΝΚΟΙ CΥΙΑΑΓ ΑΝC	S 13
125	188/189 CE	コンモドゥス	アビラ	ΑΥΤοΚΑΙC ΚΟΜΟΔΟC	CEΑΒΙΛΗΝΚCΙ ΑΑΓΒΝC	S 14
126	190/191 CE	コンモドゥス	カナタ	ΑΥΤ Κ ΜΑ ΑΝΤΟ ΚΟΜ	ΓΑΒΕΙΝ ΚΑΝΑΘ ΓΝC	M 209
127		コンモドゥス	カナタ	ΑΥΤ Κ ΜΑ ΑΝΤΟ ΚΟΜ	ΓΑΒΙΝ ΚΑΝΑΘΑ	M 210
128	190/191 CE	コンモドゥス	カナタ	ΑΥΤΚΜΑ ΑΝΤΟΚΟΜ	ΓΑΒΕΙΝ ΚΑΝΑΘ ΓΝC	S 7
129		コンモドゥス	カナタ	ΚΟΜΟΔ ΑΝΤΟΝΟC	ΓΑΒΙ ΚΑΝΑΘ	S 8
130	190/191 CE	コンモドゥス	カナタ	ΑΥΤΚΜΑΥ ΑΝΤΟΚΟΜ	ΓΑΒΕΙΝ Ε ΚΑΝΑΘΗΝ ΓΝ C	S 10
131		コンモドゥス	カナタ	ΚΟΜΟΔΟC ΑΝΤΟΝ	ΚΑΝΑ Θ	S 12
132		コンモドゥス	ゲラサ	ΑΥΤ Κ·Λ·ΑΥΡ ΚΟΜΜΟΔΟΝ	ΑΡΤΕΜΙCΤΥ ΧΗ ΓΕΡΑCΩΝ	S 20
133		コンモドゥス	ゲラサ	ΑΥΤ·Κ·Λ·ΑΥ-- ΚΟΜΜΟΔΟΝ	ΑΝΤΩΠΟΡ Χ[Ρ]ΤΩΠΡΓ Ε	S 21
134		コンモドゥス	ゲラサ	ΚΟΜΟΔΟC ΑΝΤΟΝΙΝΟ	ΑΝΤΩΠΡ ΧΡΤΩΠΡΓ	S 23
135		コンモドゥス	ゲラサ	ΚΟΜ ΠΑΤ· VΝ(?)	--- ΤΗΠΤC(?)	S 23
136		コンモドゥス	ゲラサ	ΑΥΚΛ ΚΟΜΟ	ΑΡΤ ΤVΧΓ	S 24
137		コンモドゥス	ゲラサ	ΚΟΜΟΔΟC ΑΝΤΟΝΟC	ΑΡΤ ΤVΧΓΕ	S 26
138		コンモドゥス	フィラデルフィア	Λ ΑΥΡ ΚΟΜ ΜΟΔΟ ΚΑΙC	ΦΙΛ·Κ·C·ΘΕΑ ΑCΤΕΡΙΑ	M 262
139		コンモドゥス	フィラデルフィア	·Λ·ΑΥΡ· ΚΟΜΜΟΔΟCΚ	ΦΙΛΑΔΕΛΦ ΕΩΝΚC	S 33
140		コンモドゥス	フィラデルフィア	ΚΑΙ ΑΥΡΗ	ΦΙΛΑ ΔΕ	S 34
141		コンモドゥス	フィラデルフィア	ΑΥ-- Λ·ΑΥΡΗΛ ΚΟΜΟΔΟC CΕΒΑCΤΟC	ΦΙΛ·Κ·C·ΗΡΑΚ ΛΙΟΝ ΑΡΜΑ	S 35
142		コンモドゥス	フィラデルフィア	ΑΥΤ·ΑΥΡ·ΚΟ ΜΟΔΟC	ΦΙΛ·ΚΟΙΛ· CΥΡ·	S 39
143		クリスピナ	ゲラサ	ΚΡΙCΠΙΝΑ CΕΒΑCΤΗ	ΑΡΤΕΜΙCΤΥΧΗΓΕΡΑCΩΝ	S 27

	年代	総督・皇帝・皇妃	都市名	表面	裏面	出典
144	198/199 CE	セプティミウス・セウェルス	ガダラ	AVTKACEΠTCE OVHPONCEB	ΠΟΜΠ ΗΙΕΩΝΓ ΑΔΑΡΕΩΝ ΕΤΒΕC	S 70
145	198/199 CE	カラカラ&ゲタ	ガダラ	M·AYP·ANTWN·Λ·CEΠT·ΓETAN	Π ΟΜΠΗ ΠΓΑΔΑ ΡΕΩΝ ΒΕC	S 72
146	201/202 CE	セプティミウス・セウェルス	アビラ	A·T·K·Λ·CE ΠCEOVHPo	CEABIAH NWN KOICV EEC	S 15
147	201/202 CE	ユリア・ドムナ	アビラ	ΙΟΥΛΙΑ·ΔΟΜΝΑ·CE·	CEABIAHN WNKOICVEEC·OC TO Δ	S 17
148		カラカラ	アビラ	AVTO KAI ANTWNINOC	CE ABIAHNWN KOC KOH CV TOΔ	M 214
149	201/202 CE	カラカラ	アビラ	AVTKAI-- MAVPANTWNEINOC	CELABIAH NWNK--- EEC	S 20
150	203/204 CE	セプティミウス・セウェルス	スキュトポリス	AVT[CEΠ] CEOVH·CEB	ZEC NVCA[AE]EW CKVΘOΠ IEPAKA CVΛOY	B 38
151	203/204 CE	カラカラ	スキュトポリス	[AVT]K·M·AV·ANTW[----]	NVCCCKVΘI ACV·ZE C	B 46
152	203/204 CE	ゲタ	スキュトポリス	ΠCEΠT ΓETAK	NV·CKV··I·ACV[ZE]C	B 54
153	204/205 CE	カラカラ	スキュトポリス	[AVTK·M·AV·] AN[-----]	NVCKVΘOIEPA[CV-] HE C	B 47
154	206/207 CE	セプティミウス・セウェルス	スキュトポリス	AVT·K·Λ·C·CEOVHPOC	OC NVCA EW·CKV ΘOΠ·IE PAC·AC VΛOY	B 42
155		セプティミウス・セウェルス	ゲラサ	AVT KAI Λ CEΠ CEOV IEΠ CEB	ΑΔΕΕ ΜΑΚ ΚΤΙ ΓΕΡΑC	M 256
156		セプティミウス・セウェルス	ゲラサ	AVTKAIACEΠ --- CEΠ CEO ---	[APTE]MICTYXHΓ EPACWN	S 28
157		セプティミウス・セウェルス	フィラデルフィア	--KAI·Λ·CEΠ·CEOYHPOC	[HPAKΛEION APMA] ΦIΛKOICVP	S 40
158	206/207 CE	ユリア・ドムナ	スキュトポリス	ΙΟΥΛΙΑ ΔΟΜ[NACE]	NVC·CKV ΘI EP·ACV OC	B 43
159	206/207 CE	カラカラ	スキュトポリス	AVTKMA ANTW·CEB	NVC·CKVΘOΠ·IEP·ACVA OC	B 48
160	206/207 CE	ゲタ	スキュトポリス	ΠCEΠT ΓETAK	NVCCCKVΘ OIEPACV O C	B 56a
161	214/215 CE	ユリア・ドムナ	ガダラ	ΙΟΥΛΙΑ AVΓ OYCTA	ΓΑΔΑ ΕΩ [N]ETHOC	S 71
162	214/215 CE	カラカラ	ガダラ	AVTKAICA ANTON	ΠΟΜ ΠΗΙΕΩΝ ΓΑΔΑΡΕ WNET HOC	S 75
163	214/215 CE	カラカラ	スキュトポリス	AVT·KAI· [A]NTWNINOC	NVC·CKV··IEP·ACVA HOC	B 50
164	215/216 CE	ユリア・ドムナ	スキュトポリス	ΙΟΥΛΙΑ ΔΟΜΝΑ·CEB	NVCCCKV IEPA CV ΘOC	B 44
165		ユリア・ドムナ	ゲラサ	[IOY]ΛΙΑ Δ[OM]NA	APTEMICTYXH ΓEPACW[N]	L 106
166	215/216 CE	カラカラ	スキュトポリス	AVTO·KAI· ANT[WNINOC]	ΘOC NVCAW CKVΘOΠ IEPAKA CV[ΛOY]	B 51
167		カラカラ	ヒッポス	AVTKM ANTWN	[ANTIOX?] Π P I I EP ACVA	S 28
168		カラカラ	ペラ	銘なし	·ΛΠΕΛ· T·Π·NY	S 12
169		カラカラ	ゲラサ	AVT KAIMAVP ANTWNINOC	APTEMIC TYXH ΓEPACWN	M 254
170		カラカラ	ゲラサ	AVTKAIMAVP ANTWNEINOC	ΑΔΕΕΜΑΚΚΤΙ ΓΕΡΑCWN	S 34
171		カラカラ	フィラデルフィア	AV·K·C·AVP·ANTONIN	ΦIΛ·KOI·CVPIAC	S 42
172	217/218 CE	エラガバルス	ガダラ	AVTK M AVP ANTWN	ΠΟΜΠ ΓΑΔΑΡΕΩΝ ΑΠC	M 224
173	217/218 CE	エラガバルス	アビラ	AVKMAV ANTWNINOC	CEABIA-- KOICV AΠ C	S 21
174		エラガバルス	アビラ	ANTWNIN	ABIAH NWN KCVP	S 28
175	217/218 CE	エラガバルス	スキュトポリス	AVT·K[MAV]ANTON[]	ΑΠC NVCA[E] WCKVΘ OΠOΛEI EPACA CVΛOY	B 57
176	217/218 CE	エラガバルス	ゲラサ	AYTO KAICAP ANTWNINOC	TVXH ΓEPACHNWN ET AΠC	M 255
177		エラガバルス	ゲラサ	AVTKAICAPANTWNINOC	ΑΔΕΕΑΝΔΟΡCΜΑΚΕΔAWN	S 34
178	218/219 CE	エラガバルス	ヒッポス	AY·K·M·AVP·ANTWNIN	ANTIOX·ΠP·I I T·IEP ACYA BΠC	M 204
179		エラガバルス	ヒッポス	AY·K·M·AVP·ANTWNIN	ANTIOX Π P IE P ACVA ZEVC APOTHCIOC	M 205
180	218/219 CE	エラガバルス	アビラ	KMA AN--	[CEAABI]AH NWNKC BΠC	S 31
181	218/219 CE	エラガバルス	ガダラ	AV·K·M·AVP·ANTWN---	ΠΟΜΠΗΙΕΩ ΝΓΑΔΑΡΕΩ ΝΒΠC	S 87
182	218/219 CE	エラガバルス	スキュトポリス	[AVT·K·M·AV ANT]WNEINOCCE	NVCACKVΘ IEPAACV BΠC	B 66
183	219/220 CE	エラガバルス	ガダラ	AVTK M AVP ANTWN	ΠΟΜΠΗ ΙΕΩ Ν Γ Α ΔΑΡΕΩΝ Γ Π C	M 223
184	219/220 CE	エラガバルス	ペラ	AVTKAIMA ANTΩΠ NO	ΠΕΛΛΗ ΝWN·K·CV BΠC	S 16
185	220/221 CE	エラガバルス	ペラ	ANTΩNNOC CEB	ΦIΛIΠ ΠΕΛΛΗ T Π NYMΦ KOI CY ΓΠC	M 251
186	220/221 CE	エラガバルス	スキュトポリス	AVTKMA[NTWNINO]C	NVCAIE CKVΘOΠO AITWN CΠΔ	B 71b
187		エラガバルス	スキュトポリス	AVTKMAN TWNINOCCE	NVCA CKVΘ OΠOΛ IE	B 73
188		エラガバルス	カナタ	AVKECAP ANTWNI	ΓABINIA KANAΘA	S 13
189		エラガバルス	カナタ	AVKAICAPANTWNINO	TVXKANWΘHNWN	S 15
190		エラガバルス	フィラデルフィア	AVKECANTWNINOC	ΦIΛKOICVP IAC	S 47
191	220/221 CE	アケイリア・セウエラ	スキュトポリス	[ACV--] CEOVE[-]	[NVCACK] VΘOΠΔΠC	B 77
192	221/222 CE	エラガバルス	ガダラ	AVTKMAVPANTWNINO	ΓΑΔΑ ΡΕΩΝΕΠC	S 81
193	221/222 CE	ユリア・マエサ	スキュトポリス	[I]VΛ[IA] MAICACEB	NVC[ACK] VΘOΠE(?)ΠC	B 78
194	239/240 CE	ゴルディアヌス3世	ガダラ	AVT OK·K·M·AV·ANTW·Γ O P Δ I A N O C C E B	ΠΟΜΠΓΑΔΑΡΕΩΝ Γ T	S 94
195	240/241 CE	ゴルディアヌス3世	ガダラ	[A]V·K·MA·AN TWΓ O P Δ I A N O C	ΠΟΜΠ ΓΑΔΑ ΡΕΩΝ Δ T	S 92
196	240/241 CE	ゴルディアヌス3世	スキュトポリス	AVTKM ΓO P Δ I A N O C C E B	NVC CKVΘO ΠOΛEIT WNIEPA CVΔ T	B 92

出典略号 B=Barkay H=Hippus 2004 (Segal et al. 2004) L=Lichtenberger M=Meshorer S=Spjorkerman (都市ごとに通し番号)

(1) 帝政以前

まずコインの元年にあたる前 64/63 年の状況から見ていくことにする。

ポンペイウスが東方遠征においてエルサレム攻略の後にギリシア都市を再建したことをヨセフスは『ユダヤ古代誌』(以下『古代誌』) 14 巻 74 節から 76 節で以下のように伝えている⁹⁾。

いっぽう、彼(ポンペイウス)は、エルサレムをローマ人の進貢国とするとともに、先にユダヤ人が征服した

コイレ・シリアの町まちを彼らから取り上げて、自分自身が任命した知事の支配下に置いた。すなわち彼は、こうして、それまでは、国外遠く進出していたこの民族をその国境内に封じ込めたわけである。彼はまた、自分の解放奴隷であるガダラ人デメトリオス(Demetorios)を喜ばそうと、先にユダヤ人に破壊されたガダラの町を再建し、また、ヒッポス、スキュトポリス、ペラ、ディオーン、サマリア(Samaria)、マリサ(Maresha)、アシドド(Ashdod)、ヤムニア(Jamnia)、アレトウサ(Arethusa)等の町には、その町本来の住民を住ませた。さて、完



図 2



図 3



図 4



図 5



図 6



図 7



図 8



図 9



図 10



図 11



図 12



図 13



図 14



図 15



図 16



図 17



図 18



図 19



図 20



図 21



図 22



図 23



図 24



図 25

全に破壊されてしまった町まちを除けば、以上が再建された内陸部の町であるが、ポンペイオスはまた、ガザ (Gaza)、ヨッパ (Joppa)、ドラ (Dor)、ストラトン (Straton) の塔等の海沿いの町——ストラトンの塔は、のちにヘロデによってすばらしい改造が行われて、港や神殿もつくられ、カイサレイア (Caesarea) と改名された——をユダヤ人の手から解放し、シリア地方に併合させた。

ガダラは解放奴隷のデメトリオスの出身地であったために再建されたことが他の都市に先立って述べられている。その後、ガビニウスが総督の時代に五つのシュネドリオン (Synedrion) とよばれる行政機関の一つがガダラに設置されたことも伝えられている⁷⁾。このようにガダラははっきりとポンペイウスと強く結びついており、ポンペイウス紀年元年のコインを造幣することも許されていたのではないかと考えることができる。カナタに関してはポンペイウスと直接の関係を示す史料はない。

ヨセフスはさらに『古代誌』14巻87節で総督ガビニウスによる都市の再建を記しており、そこにはデカポリス都市では唯一スキュトポリスの名が挙げられている⁸⁾。スキュトポリスはこの時期にガビニウスの銘を刻んでいることから直接的な関係があったことが推察される。

この時期にペラだけが再建された都市に挙げられていながらコインを造幣していないが、ヨセフスはハスモン朝の王アレクサンドロス・ヤンナイオス (Alexandros Jannaeus) の部下によってユダヤ人の慣習を受け入れなかったので破壊されたことを伝えており (『古代誌』第13巻397節)、コインを造幣する都市の基盤が失われていたと考えられる。

ヨセフスはまた『ユダヤ戦記』(以下『戦記』)1巻129節でポンペイウスがやって来たときにフィラデルフィアにはナバテア王アレタス3世 (Aretas) の軍が駐屯していることを伝えている。アビラ、ゲラサについてはポンペイウスと関連する記述はない。

(2) ユリウス・クラウディウス朝期

前37年にヘロデ大王 (Herod) がハスモン朝を滅ぼして統治を開始すると、前31/30年のガダラのものを除き、デカポリス都市ではコインは造幣されなくなる。前30年はアウグストゥスがプトレマイオス朝を滅ぼし、エジプトがローマの属州になった年である。この時にヘロデ大王はシリア経由でエジプトに向かうアウグストゥスを歓待し、前36年にマルクス・アントニウス (Marcus Antonius) からクレオパトラ (Cleopatra) に与えられていたコイレ・シリアとガダラ、ヒッポス、サマリアや沿岸部の都市をアウグ

ストゥスから加領されたことをヨセフスは伝えている (『戦記』1巻396節、『古代誌』15巻217節)。ガダラのコインはローマの承認のもとでヘロデ大王の領地に入ったことを顕彰したものとすることもできるが、3章で述べた尊称の問題やその後の治世では造幣されていないことを考慮すると、ヘロデ大王の治世下ではコインは製造されなかったと考えるべきであろう⁹⁾。

前4年にヘロデ大王が死ぬとガダラとヒッポスはヘロデの王国から切り離されて属州シリアに加えられている (『戦記』2巻97節、『古代誌』17巻320節)。

この後、ティベリウスからクラウディウスまでは特にデカポリス都市に関する記述はヨセフスの中にみられない。カナタとガダラとスキュトポリスで比較的一定してコインが造幣されているところを見ると、ユダヤ人との小さな抗争はあるもののシリア属州の下で安定した時期であったと考えられる。クラウディウス治世下の後44年、アグリッパ1世 (Agrippa) の死去で、ユダヤはローマ属州として総督の管轄下に置かれることとなった。48年には再びアグリッパ2世に統治権が与えられるが、属州総督との二重支配体制となっていた。

54年にネロが即位すると、ユダヤでは戦争の気配が濃厚になりはじめる。このころからカエサレアではユダヤ系住民とギリシア系住民の紛争が起ころはじめ、66年にシナゴークに隣接する土地の売買を巡って衝突が起これると、ユダヤ人がローマ兵を殺す事態へと拡大した。6月に神殿でのローマへの供犠が中止され、これが宣戦布告の代わりとなって第1次ユダヤ戦争が勃発した (『戦記』2巻411-417節)。この時に、ユダヤ人たちによってギリシア系の都市がつぎつぎに焼き打ちにあったことをヨセフスは『戦記』2巻458節から459節で次のように伝えている。

カイサレイアからの衝撃的な知らせに全国民は憤激し、手分けしてシリア人の村々と近隣の町々であるフィラデルフェイアや、エッセボニティス (Esbonitis)、ゲラサ、ベルラ、スキュトポリスを襲った。次に彼らはガダラや、ヒッポス、ガウラニティス (Gaulanitis) を襲撃し、いくつかの町々を制圧したり火を放ったりしながらツロびと (Tyre) の町カダサ (Kedasa) や、プトレマイス (Ptolemais)、ガバ (Gaba)、カイサレイアにまで進んだ。セバステ (Sebaste) もアスカロン (Askelon) も彼らの勢いに抗することはできなかった。彼らはこれらの町々を焼き払った後、アンテドン (Anthedon) とガザを破壊し尽くした。これらの町々のそれぞれの周囲にある多くの村々も略奪され、おびたしい数の男たちが捕らえられ、殺された。

ヨセフスの記述ではここで初めて、ガダラとゲラサ、フィラデルフィアが併記されている。この年の冬にウェスパシアヌスがネロの命令でユダヤに派遣されることが決定し、翌67年4月、ウェスパシアヌスはプトレマイスに到着、息子のティトゥスもアレクサンドリア (Alexandria) から第15軍団を率いて合流した。この時にガダラの有力者たちが使いを送っていることをヨセフスは『戦記』4巻413節で記している。ヨセフスは『自伝』の同じ場面を述べている箇所、「ウェスパシアヌスがプトレマイスに到着すると、シリアのデカポリスの指導者たちは、ティベリアス (Tiberias) のユストス (Justus) に激しい非難を加えた。(410節)」と記している。同様の内容が341節から342節でも記されている。すなわち『戦記』ではガダラの有力者として記しているところを『自伝』ではデカポリスの指導者たちとしているのである。この他にヨセフスがデカポリスという言葉を用いているのはウェスパシアヌスのティベリアスへの進軍の場面 (『戦記』3巻446節) で、スキュトポリスがデカポリス最大の町であると述べている。いずれも67年の4月から9月までの短期間におきた出来事の記述でのみ用いられている。

68年3月にウェスパシアヌスの軍団をガダラの人々は歓呼の声を上げて迎えており、ガダラは騎兵と歩兵の守備隊で保護されるという厚遇を得ている (『戦記』4巻417節)。

ネロの治世下ではユダヤ戦争序盤の66/67年と67/68年にもみコインは造幣されているが、スキュトポリス、ヒッポス、ガダラのものに加えて、この時期に初めてゲラサのものも現れる。スキュトポリスでは66/67年以降は160年までコインが造幣されなくなる。

(3) フラウィウス朝期

ネロの死後に起こった69年の内乱を経て、ウェスパシアヌスが7月に皇帝に推戴され、12月に皇帝となると、翌70年にエルサレム攻略をティトゥスに委ねて、ローマへと帰還した。71/72年と72/73年にガダラで造幣されたコインに皇帝と同じ銘でティトゥスが刻まれているのは、ウェスパシアヌスに代わってユダヤ戦争を指揮したからであると思われる。70年9月にエルサレムが陥落し、73年5月にローマに抵抗するユダヤ人の最後の砦であったマサダ要塞 (Masada) が陥落し、第1次ユダヤ戦争が終結する。ウェスパシアヌス治世下のコインはこの期間にのみ造幣されている。ガダラではこの年以降、160年までコインは造幣されなくなる。一方で、フィラデルフィアやペラといった今までなかった都市にコインの造幣が見られ始める。ティトゥス治世初年の78/79年とドミティアヌス治世初年の80/81年にフィラデルフィアで、82/83年にペラで

造幣されている。

なお、69年以降の記述の中でヨセフスはデカポリス都市については触れていない。

1世紀末からローマによるパレスチナ (Palestina) とトランス・ヨルダン地域の再編が行われ始める。94年にはアグリッパ2世の死去に伴うヘロデ家の断絶により再びユダヤは属州としてローマの管轄下に入ることとなった。

(4) 五賢帝期

トラヤヌス治世下の106年にナバテア王ラベル2世 (Rabbel) が死去すると、ローマ第3軍団キュレナイカ (Cyrenaica) はエジプト属州から北上してペトラ (Petra) を征服し、一方でシリアに駐屯していたローマ第6軍団フェラタ (Ferrata) は南下してボスラ (Bosra) を征服し、ボスラを州都としてアラビア属州が成立した¹⁰⁾。これらの征服に対してナバテア人からの本格的な抵抗があったという史料は残っていない。アラビア属州の成立後すぐに新トラヤヌス街道 (Via Nova Traiana) の建設が始まり、ボスラからフィラデルフィア、ペトラを経由しアカバへと至る南北の交易路となった。

ハドリアヌスは合計で12年間におよぶ3回の属州巡幸を行っている。その3回目の巡幸は小アジアからエジプトへと至るもので、その途中129年から130年にかけて越冬のためにゲラサに滞在している。そのことを顕彰してフラウィウス・アグリッパ (Flavius Agrippa) という名士の資金提供によって建設された横幅37.45m、高さ21.5mの巨大な凱旋門を都市の南側の入り口にみる事ができる¹¹⁾。ハドリアヌス治世下ではフィラデルフィアとゲラサでのみコインが造幣されているがゲラサのものは4章でみたように紀年の記し方などからこのハドリアヌスの滞在に関連しているものと考えられる。

越冬の後、ハドリアヌスはエルサレムへと向かい、荒廃していた都市を再建しようとした。その際に、ユダヤ第二神殿の跡地にユピテル神殿 (Jupiter) を建立して都市名をアエリア・カピトリナ (Aelia Capitolina) と名付けた¹²⁾。さらにユダヤ人が割礼を施すことを禁止したために、シメオン・バル・コホバ (Simon bar Kokhba) を首領としてユダヤ人がローマへの反旗を翻し、第2次ユダヤ戦争が勃発した¹³⁾。この反乱は初めの2年半は成功を収め、ユダヤ人はコホバを中心に政治的支配権を取り戻した。この成功を記念して「イスラエル解放の第1年」というコインが造幣されている。

ハドリアヌスがこの反乱に対し、135年に駐屯軍である第6軍団フェラタをはじめとして第10軍団フレテンシス (Fretensis)、第22軍団デイオタリアナ (Deiotariana)、第3軍団キュレナイカ、第3軍団ガリカ (Gallica) など、

総勢 10 万を超える兵力を動員して、徹底的な鎮圧を図り、58 万のユダヤ人が戦死したことをディオ・カッシウスは伝えている（『ローマ史』9 卷 13 章）¹⁴⁾。ハドリアヌスはユダヤ的なものの徹底的な根絶を図り、属州ユダヤの名を廃して、属州シリア・パレスチナ（Syria Palaestina）とした（Sartre 2005: 131）。この後、コロニア（Colonia）へ都市の地位を昇格させるとギリシア・ローマ風の都市名にすることが始まる。例えば、アントニヌス・ピウス治世下でセフフォリス（Sepphoris）はディオカエサレア（Diocaesarea）と改名している。デカポリス都市のコインにもギリシア風の都市の別名が刻まれるようになるのも同じ時期である。

アントニヌス・ピウス治世最晩年の 159/160 年にガダラでコインの造幣が再開されるとそこにはポンペイウスの名前が記されるようになる。ここにはゲラサに対するガダラの強いライバル心がみられる。ウェスパシアヌス治世下までは最も多くのコインを造幣し、先駆的な役割を果たしていたガダラが、属州アラビアの成立後、繁栄の中心が新トラヤヌス街道沿いに移り、ハドリアヌスの巡幸においてはゲラサが滞在地に選ばれ、その優位性に危機感を持っていたと考えられる。そして、再びコインの造幣が許されると、銘にローマとの強い結びつきと伝統とを誇示するためにポンペイウスの名を刻んでいるのである。第 2 次ユダヤ戦争後の 2 世紀後半、属州アラビアの各都市はパークス・ローマーナ（Pax Romana ローマの平和）の恩恵を享受し、都市を飛躍的に発展させたことは残存する遺構から確認できる。おそらくデカポリスの各都市は安定した政治状況の中で、都市の伝統を誇示しながらローマとの関係を強めていくことを競っていたと思われる。カナタのコインにガビニウスの銘がみられるのもローマとの結びつきの原点を示していると考えられる。

175 年前後にコインの造幣が増えているのは、シリア総督であったアウディウス・カッシウス（Avidius Cassius）がクーデターを起こし、その鎮圧のためにシリアを訪れたことによるものと考えられる。

続くコンモドゥス治世下では 23 もの都市でコインが造幣されており、本稿で対象とした 8 つの都市すべてでみられる。

(5) セウエルス朝期

198 年の秋から 199 年の夏頃までセプティミウス・セウエルスがパレスチナの地を訪れており、ガダラのコイン造幣はこれに関連したものと思われる。スキュトポリスでは 203/204 年からの 3 年間に集中してコインの造幣が見られるが、この都市での何か特別なイベントに関連しているものと考えられている（Barkay 2003: 191）。

215 年にカラカラはシリアのアンティオキアからエジプトのアレクサンドリアにかけて巡幸を行っている。ガダラとスキュトポリスでそれに関連すると思われるコインの造幣が行われている。コインの大きさなどからバルカイは、カラカラがこの 2 都市を訪れたのではないかと考えている（Barkay 2003: 191）。

エラガバルスの治世はわずかに 4 年足らずであるが、彼がシリア出身であり、シリアの太陽神エル・ガバル（El Gabal）に由来する名前であることから、シリアとの密接な関わりがあったことを推測させる。コインについても 35 もの都市で造幣が確認されている。デカポリス都市でもすべてでエラガバルスのコインがみられ、ガダラとスキュトポリスを除いて最後の造幣となっている。

(6) セウエルス朝期以降

ゴルディアヌス 3 世治世下の 240/241 年にデカポリス都市でのコインの造幣は終わりを迎える。研究者たちはその要因については 1 世紀末から徐々にコインの流通量が増加したために、3 世紀に入ると深刻なインフレーションに見舞われたことを挙げているが、論拠となる史料は見つかっていない（Barkay 2003: 193）。

以上、文献史料と照らし合わせながらデカポリス都市の歴史経過とコインの銘との関係を見てきたが、デカポリスがまとまって行動していることがうかがえる時代は 67 年の第 1 次ユダヤ戦争の時期だけであることが分かる。ポンペイウスの東方遠征について、その恩恵を最も受けたのはガダラとスキュトポリスで、ゲラサ以南はポンペイウスとの関わりを示す出来事は起こっていない。さらにゲラサとフィラデルフィアではコインの造幣も始まってはいない。一方、ハドリアヌス帝の巡幸の際にはゲラサがその滞在地として選ばれており、ローマとの関わりが第 1 次ユダヤ戦争以降はゲラサ以南にも及び、コインの造幣もデカポリス都市すべてで行われるようになってくる。

6. コインの銘からみたデカポリス

本章では 3 章で述べたデカポリスに関する諸説に対し、コインの銘と造幣状況の分析からおこる疑問を整理し、デカポリスがどのような性格を持つあつまりであったのかを考えてみたい。

まずはデカポリスがヘレニズムを起源とする都市連合とするならば、ポンペイウスの東方遠征時には何らかのまとまりができてはいるはずであるのに、ポンペイウス紀年元年のコインがカナタとガダラでしかみられないのはなぜか。さらに帝政以前はゲラサとフィラデルフィアの南の 2 都市では造幣が行われていないのはどうしてか。デカポリスが

表2 銘の分析

表面 (左欄) : 皇帝名の銘が有→○ 無→● 両方→○
 裏面 (右欄) : ポンペイウス紀年の銘 有→○ 無→● (年代は推定で挿入) 両方→○ 個人名: ポンペイウス→P ガビニウス→G

西暦	皇帝・皇妃	カナタ	ヒッポス	ガダラ	アピラ	ペラ	スキュト ボリス	ゲラサ	フィラデル フィラ	備考
63		● ○		● ○						
62										
61										
60										
59										
58				● ○						
57							● ●G			
56										
55										
54							● ○G			
53										
52										
51										
50										
49										
48										
47										
46				● ○						
45							● ○			
44				● ○						
43				● ○						
42										
41			● ○							
40			● ○	● ○						
39			● ○	● ○						
38			● ○							
37										
36										
35										
34										
33										
32										
31	(アウグストゥス)									
30	(アウグストゥス)			○ ○						
29	(アウグストゥス)									
28	(アウグストゥス)									
27-1	アウグストゥス									
1-13	アウグストゥス									
14	アウグストゥス/ティベリウス									
15-28	ティベリウス									
29	ティベリウス			○ ○						
30-36	ティベリウス									
37	ティベリウス/カリグラ									
38	カリグラ			○ ○						
39	カリグラ	● ○								
40	カリグラ						○ ○			
41	カリグラ/クラウディウス			○ ○						
42	クラウディウス						○ ○			
43	クラウディウス									
44	クラウディウス									
45	クラウディウス			○ ○						
46	クラウディウス									
47	クラウディウス									
48	クラウディウス									
49	クラウディウス									
50	クラウディウス	● ○								
51	クラウディウス			○ ○						
52	クラウディウス						○ ○			
53	クラウディウス									
54	クラウディウス/ネロ									
55-66	ネロ									
67	ネロ						○ ○			
68	ネロ/ガルバ		○ ○	○ ○				○ ○		
69	ガルバ/オト/ウイテリウス/ウェスパシアヌス									
70	ウェスパシアヌス									

西暦	皇帝・皇妃	カナタ	ヒッポス	ガダラ	アビラ	ペラ	スキュト ポリス	ゲラサ	フィラデル フィラ	備考
71	ウエスパシアヌス									
72	ウエスパシアヌス			◎*	◎					※テイトゥスの名が刻まれているものもあり
73	ウエスパシアヌス			◎*	◎					※テイトゥスの名のみ
74	ウエスパシアヌス									
75	ウエスパシアヌス									
76	ウエスパシアヌス									
77	ウエスパシアヌス									
78	ウエスパシアヌス									
79	ウエスパシアヌス/テイトゥス								● ◎	
80	テイトゥス									
81	テイトゥス/ドミティアヌス								○ ◎*	※銘が2種類、また同年でテイトゥスとドミティアヌスの銘もあり
82	ドミティアヌス									
83	ドミティアヌス	◎ ◎	◎ ●			◎ ◎				
84-94	ドミティアヌス									
95	ドミティアヌス									
96	ドミティアヌス/ネルヴァ	◎ ◎								
97	ネルヴァ									
98	ネルヴァ/トラヤヌス									
99-116	トラヤヌス									
117	トラヤヌス/ハドリアヌス									
118	ハドリアヌス									
119	ハドリアヌス									
120	ハドリアヌス							○ ○		
121-131	ハドリアヌス									
132	ハドリアヌス							◎ ●		
133-137	ハドリアヌス									
138	ハドリアヌス/アントニヌス・ピウス									
139-159	アントニヌス・ピウス									
160	アントニヌス・ピウス		◎ ●	◎*	◎P		◎ ●		◎ ●	※マルクス・アウレリウス、ルキウス・ウェルスの銘もあり
161	アントニヌス・ピウス/マルクス・アウレリウス			◎	◎P				◎ ●	
162	マルクス・アウレリウス/ルキウス・ウェルス			◎*	◎P	◎ ◎		◎*	●	※ファウスティナの銘もあり
163	マルクス・アウレリウス/ルキウス・ウェルス			◎	◎P	◎*	◎			※ファウスティナの銘もあり
164	マルクス・アウレリウス/ルキウス・ウェルス						◎*	○		※ファウスティナの銘もあり
165	マルクス・アウレリウス/ルキウス・ウェルス								● ◎	
166	マルクス・アウレリウス/ルキウス・ウェルス		◎ ○							
167	マルクス・アウレリウス		◎*	◎		◎*	◎			※ルキウス・ウェルスの銘のみ
168	マルクス・アウレリウス									
169	マルクス・アウレリウス									
170	マルクス・アウレリウス									
171	マルクス・アウレリウス									
172	マルクス・アウレリウス									
173	マルクス・アウレリウス									
174	マルクス・アウレリウス			◎ ◎						
175	マルクス・アウレリウス						◎*			
176	マルクス・アウレリウス						◎			※ルキッラ、コンモドゥスの銘もあり
177	マルクス・アウレリウス								● ◎	
178	マルクス・アウレリウス					◎*	◎	◎*	●	※ルキッラ、コンモドゥスの銘のみ
179	マルクス・アウレリウス			◎*	◎P			◎*	●	※コンモドゥスの銘のみ
180	マルクス・アウレリウス/コンモドゥス			◎*	◎P			◎*	●	※コンモドゥス、クリスピナの銘のみ
181	コンモドゥス						◎		◎ ●	
182	コンモドゥス						◎ ◎			
183	コンモドゥス						◎			
184	コンモドゥス		◎ ○			◎ ○				
185	コンモドゥス						◎			
186	コンモドゥス						◎			
187	コンモドゥス									
188	コンモドゥス				◎ ◎					
189	コンモドゥス				◎ ◎					
190	コンモドゥス									
191	コンモドゥス	◎ ○G								
192	コンモドゥス/ベルティナクス									
193	ベルティナクス/D・ユリアヌス/S・セウエルス									
194	セプティミウス・セウエルス									
195	セプティミウス・セウエルス									
196	セプティミウス・セウエルス									
197	セプティミウス・セウエルス									
198	セプティミウス・セウエルス									

西暦	皇帝・皇妃	カナタ	ヒッポス	ガダラ	アビラ	ペラ	スキュトポリス	ゲラサ	フィラデルフィア	備考
199	セプティミウス・セウェルス			◎* ◎P				◎ ●	◎ ●	※カラカラ、ゲタの銘もあり
200	セプティミウス・セウェルス									
201	セプティミウス・セウェルス									
202	セプティミウス・セウェルス				◎* ○					※カラカラ、ユリア・ドムナの銘もあり
203	セプティミウス・セウェルス						◎*			
204	セプティミウス・セウェルス						◎*	◎		※カラカラ、ゲタの銘もあり
205	セプティミウス・セウェルス						◎			※カラカラの銘のみ
206	セプティミウス・セウェルス						◎*			
207	セプティミウス・セウェルス							◎		※カラカラ、ゲタ、ユリア・ドムナの銘もあり
208	セプティミウス・セウェルス									
209	セプティミウス・セウェルス									
210	セプティミウス・セウェルス									
211	S・セウェルス/カラカラ/ゲタ									
212	カラカラ/ゲタ									
213	カラカラ									
214	カラカラ									
215	カラカラ		◎ ●	◎* ◎P			◎ ◎		◎ ●	※ユリア・ドムナの銘もあり
216	カラカラ						◎* ◎ ◎*	●		※ユリア・ドムナの銘もあり
217	カラカラ/マクリヌス									
218	マクリヌス/ディアドゥメニウス/エラガバルス			◎ ◎P ◎	◎ ◎		◎ ◎ ◎ ○			
219	エラガバルス	◎ ●	◎ ○	◎ ◎P ◎	◎ ○		◎ ◎		◎ ●	
220	エラガバルス			◎ ◎P		◎*	◎ ◎			※カラカラの銘もあり
221	エラガバルス					◎ ◎	◎* ○			※アクイリア・セウエラの銘もあり
222	エラガバルス/セウェルス・アレクサンデル			◎ ◎P			◎* ◎			※ユリア・マエサの銘のみ
223	セウェルス・アレクサンデル									
234	セウェルス・アレクサンデル									
235	S・アレクサンデル/マクシムス・トラクス									
236	マクシムス・トラクス									
237	マクシムス・トラクス									
238	M・トラクス/ゴルディアヌス1・2世/バルビヌス									
239	ゴルディアヌス3世									
240	ゴルディアヌス3世			◎ ◎P						
241	ゴルディアヌス3世			◎ ◎P			◎ ○			
242	ゴルディアヌス3世									
243	ゴルディアヌス3世									
244	ゴルディアヌス3世									

連合として政治的に機能していたならば、デカポリスという銘が都市の属性を示すものとして一切でてこないのはどうしてだろうか。

次にデカポリスを地理的な区分や行政の単位であるとするならば、なぜコインの銘の中で地理的属性を示す言葉にコイレ・シリアという銘だけが用いられるのか。また、ダマスカスやカナタといった距離の離れた都市を地理区分や行政単位としてまとめることができるのだろうか。さらにヨセフスが『戦記』3巻35-58節でトランス・ヨルダン地域をガリラヤ、ペラエア、ガウラニティス (Gaulanitis) などの地理区分を示す言葉を使って説明しているが、ここにもデカポリスという言葉は出てきていないのはどうしてだろうか。以上のように先行の諸説では説明のつかない状況がコインの銘にはみとれる。

それでは、デカポリスとはいったいどのようなまとまりと考えることができるのだろうか。第4章で述べたように表2でデカポリス都市全体のコインの銘の状況を俯瞰してみると、銘の型式が比較的一定でポンペイウス紀年を順守するガダラやスキュトポリスと、銘の型式が一定でなくポンペイウス紀年も限定的にしか使用していないゲラサとフィラデルフィアとが対極をなしていることがわかる。コイ

ンの造幣状況からは連合といえるようなまとまりがあったと考えることはできない。ヨセフスの記述からもポンペイウスの東方遠征によってゲラサとフィラデルフィアが恩恵を受けた様子はいかががえない。ポンペイウス紀年の使用状況からみてもゲラサとフィラデルフィアがポンペイウスとの結びつきを強く感じていたとは考えにくい。一方、ガダラはコインの銘に特別にポンペイウスの銘を刻んでいることからポンペイウスと都市のアイデンティティを強く結び付けていることが分かる。少なくともポンペイウスの東方遠征の時にはデカポリスに挙げられている都市が結びつきをもって存在していたとはいえない。

第5章で述べたようにヨセフスはデカポリスという言葉が4回使っているが、そのうちの3回はブトレマイスに到着したウェスパシアヌスへデカポリスの代表団が赴いて窮状を訴えている場面である。ヨセフスの限定的な使用をそのまま解釈するならば、デカポリスとは第1次ユダヤ戦争時に陳情のために集められたギリシア系都市の代表団で、おそらくはガダラやスキュトポリスなどポンペイウスの東方遠征以来もともとローマ側に与していた都市を中心に利害関係を同じくするその他のギリシア系の都市を加えて組織されたものと考えられる。ウェスパシアヌスが直接赴い

ていることからこの時もデカポリスの中心都市はガダラとスキュトポリスであったことは間違いない。ただしヨセフスはガダラ、スキュトポリス、フィラデルフィア、ゲラサをユダヤ人によって襲撃された村々を記述する際に初めて併記しており、この時は同じ利害関係をもったギリシア系の都市群であったことが分かる。また、ゲラサでのコインの造幣もこの時期から始まっており、ポンペイウス紀年を順守している数少ない時期でもある。おそらくこれらの都市群が同一の行動をとったのはこの時だけで、第1次ユダヤ戦争後はそれぞれ独自にローマとの関係を競い合って構築していったと考えるならば、その後のコインの造幣年代や銘に差異が生じることも理解できる。また、ガダラやスキュトポリスがデカポリスの中心都市として活躍していたことがうかがえるにもかかわらず、「デカポリス」という言葉を碑文にもコインの銘にも用いていないことも、デカポリスというまとまりがこの一時期のものであったために政治的にあまり有効な名称とならなかったと考えれば説明が可能であろう。

おわりに

コインそのものは小さく限られた情報しかそこに刻むことはできないが、それらは交易によって広く流布し、都市の評価を左右する重要な要素であったために、刻まれる一字一字には都市の意図が反映している。本稿はデカポリス都市で造幣されたコインを対象を絞り、その銘からデカポリスの性格を考察してきたが、さらに各都市に残存する遺構の建設年代との比較を加えた検討が必要であろう。今後の課題としたい。

本研究は松下国際財団 2008 年度研究助成による研究成果の一部である。

註

- 1) プリニウス『プリニウスの博物誌』5巻16章74節。
- 2) 地中海沿岸部のガザラフィアでもポンペイウス紀年が用いられている。
- 3) Wineland 2001: 60-61.
- 4) ポンペイウス紀年の詳細については、Meimaris 1992: 74-135を参照。
- 5) ガダラとポンペイウスとガレー船と結びつきについては必ずしも明確であるとはいえず、コインのモチーフの取り扱い方に関するより詳細な検討が必要であろう。
- 6) 同様の内容の記述が『戦記』1巻155-156節に見られるが、ディオオンが欠落している。なお、ヨセフスの邦訳については、すべて秦訳（『古代誌』2000年、『戦記』2002年、ともにちくま学芸文庫）を用いることとする。
- 7) 『戦記』1巻169-170節、『古代誌』14巻91節。
- 8) 同様の内容の記述が『戦記』1巻166節に見られる。
- 9) ガダラがヘロデの治世17年目（前21年）にアウグストゥスが

シリアに来た際に、ヘロデを暴力行為と略奪行為および神殿破壊を告発し、王国からの分離を望んでいたことをヨセフスは伝えている（『古代誌』15巻354-358節）。

- 10) アラビア属州の成立をめぐることは、Millar 1993: 93-94; Ball 2000: 63-64; Sartre 2005: 133-135を参照。ペトラを州都とする説もある。
- 11) 凱旋門に関する詳細は Kraeling 1938: 73-83、碑文の詳細については Kraeling 1938: 401-402。
- 12) アエリアはハドリアヌスの氏族名アエリウスにちなんでおり、カピトリーナはローマの神ユピテル・カピトリヌス（Jupiter Capitolinus）に奉獻されたことを示している。
- 13) 第2次ユダヤ戦争へと至る経緯については、ローマの歴史家ディオ・カッシウスの『ローマ史』9巻12-14章で述べられている。
- 14) 第2次ユダヤ戦争に関連する文献史料は、ヤディン 1979: 321-330頁にまとめて収められている。

参考文献

- Abel, F. M. 1967 *Géographie de la Palestine*. Vol. 2. Paris, Librairie Lecoffre.
- Avi-Yonah, M. 1979 *The Holy Land: From the Persian to the Arab Conquests (536 B.C. to A.D. 640)*. Michigan, Baker Book House.
- Ball, W. 2000 *Rome in the East*. London, Routledge.
- Barkay, R. 1990-91 A New Coin Type of Dionysos from Canatha. *Israel Numismatic Journal* 11: 72-76.
- Barkay, R. 1994-99 Coins of Roman Governors Issued by Nysa-Scythopolis in the Late Republican Period. *Israel Numismatic Journal* 13: 54-62.
- Barkay, R. 2003 *The Coinage of Nysa-Scythopolis*. Jerusalem, The Israel Numismatic Society.
- Birley, A. R. 1987 *Marcus Aurelius: A Biography*. London, Batsford.
- Birley, A. R. 1997 *Hadrian: The Restless Emperor*. London, Routledge.
- Bowsher, J. M. C. 1987 Architecture and Religion in the Decapolis- A Numismatic Survey. *Palestine Exploration Quarterly* 119: 62-69.
- Butcher, K. 2003 *Roman Syria and the Near East*. London, The British Museum Press.
- Carradice, I. 1982-83 Coinage in Judaea in the Flavian Period, A.D. 70-96. *Israel Numismatic Journal* 6-7: 14-21.
- Cohen M. G. 2006. *The Hellenistic Settlements in Syria, the Red Sea Basin, and North Africa*. Los Angeles, University of California Press.
- Foerster, G. and Y. Tsafirir 1986-87 Nysa-Scythopolis- A New Inscription and the Titles of the City on its Coins. *Israel Numismatic Journal* 9: 53-58.
- Gatier, P. 1990 Décapole et Coelé-Syrie: deux inscriptions nouvelles. *Syria* 67: 205-206.
- Graf, D. 1986 The Nabataeans and the Decapolis. In P. Freeman and D. Kennedy (eds.) *The Defence of the Roman and Byzantine East, 785-796*. Oxford, Archaeopress.
- Graf, D. 1992 Hellenisation and the Decapolis. *Aram* 4: 1-48.
- Grant, M. 1994 *The Antonines: The Roman Empire in Transition*. London, Routledge.
- Greenhalgh, P. 1981 *Pompey: The Republican Prince*. London, Weidenfeld & Nicolson.
- Hoffmann, A. and S. Kerner (eds.) 2002 *Gerasa - Gadara und die Dekapolis*. Mainz, Verlag Philipp von Zabern.
- Howgego, C. (ed.) 2003 *Coinage and Identity in the Roman Provinces*. Oxford, Oxford University Press.
- Isaac, B. 1981 The Decapolis in Syria: A Neglected Inscription. *Zeitschrift*

- f r Papyrologie und Epigraphik* 44: 67-74.
- Issac, B. 1990 *The Limits of Empire: The Roman Army in the East*. Oxford, Oxford University Press.
- Jones, A. H. M. 1971 *The City of Eastern Roman Provinces*. Oxford, Oxford University Press.
- Kennedy, D. 2007 *Gerasa and the Decapolis*. London, Duckworth & Company.
- Kinder, A. 1982-83 The Status of Cities in the Syro-Palestinian Area as Reflected by Their Coins. *Israel Numismatic Journal* 6-7: 79-87.
- Kraeling, C. (ed.) 1938 *Gerasa City of the Decapolis*. New Haven, American Schools of Oriental Research.
- Lichtenberger, A. 2000-02 Reading a Hitherto Lost Line and the Location of the Naumachia at Gadara. *Israel Numismatic Journal* 14: 191-193.
- Lichtenberger, A. 2003 *Kulte und Kultur der Dekapolis*. Wiesbaden, Harrassowitz.
- Lichtenberger, A. 2003-06 Choosing a Coin Type: A Case Study in a Heracles Type of Philadelphia. *Israel Numismatic Journal* 15: 90-96.
- Meimaris, Y. E. 1992 *Chronological systems in Roman-Byzantine Palestine and Arabia*. Paris, De Boccard.
- Meshorer, Y. 1985 *City Coins of Eretz-Israel and the Decapolis in the Roman Period*. Jerusalem, The Israel Museum.
- Millar, F. 1993 *The Roman Near East 31 BC-AD 337*. Harvard, Harvard University Press.
- Northedge, A. 1992 *Studies on Roman and Islamic Amman*. Oxford, Oxford University Press.
- Opper, T. 2008 *Hadrian: Empire and Conflict*. London, The British Museum Press.
- Parker, T. 1975 The Decapolis Reviewed. *Journal of Biblical Literature* 94: 437-441.
- Sartre, M. 2005 *The Middle East under Rome*. Harvard, Harvard University Press.
- Segal, A. 1997 *From Function to Monument: Urban Landscapes of Roman Palestine, Syria and Provincia Arabia*. Oxford, Oxbow Books.
- Segal, A., J. Młynarczyk, M. Burdajewicz, M. Schuler and M. Eisenberg (eds.) 2004 *Hippos-Sussita Fourth Season of Excavations (2004)*. Haifa, University of Haifa.
- Sherwin-White, A. N. 1984 *Roman Foreign Policy in the East 168 B.C. to A.D. I*. London, Gerald Duckworth & Co Ltd.
- Smallwood, E.M. 1981 *The Jews under Roman Rule*. Leiden, Brill.
- Smith, G. A. 1972 *The Historical Geography of the Holy Land*. London, Collins.
- Smith R. H., A. McNicoll and B. Hennessy (eds.) 1982 *Pella in Jordan 1*. Canberra, Australian National Gallery.
- Smith R. H., A. McNicoll and B. Hennessy (eds.) 1989 *Pella in Jordan 2*. Canberra, Australian National Gallery.
- Spijkerman, A. 1978 *The Coins of the Decapolis and Provincia Arabia*. Jerusalem, Franciscan Printing Press.
- Stein, A. 1990 *Studies in Greek and Roman Inscriptions on the Palestinian Coinage under the Principate*. Unpublished Ph.D. thesis, Tel-Aviv University.
- Weber, T. 2002 *Gadara - Umm Qēs I. Gadara Decapolitana*. Wiesbaden, Harrassowitz.
- Wineland, J. D. 1992 Archaeological and Numismatic Evidence for the Political Structure and Greco-Roman Religions of the Decapolis, with Particular Emphasis on Gerasa and Abila. *Aram* 4: 329-342.
- Wineland, J. D. 1992 *Ancient Abila: An Archaeological History*. Oxford, Archaeopress.
- バーネット, A. (新井佑造訳) 1998 『コインの考古学』学芸書林。
- プリニウス (中野定雄他訳) 1986 『プリニウスの博物誌』雄山閣出版。
- スバルティアヌス他 (南川高志他訳) 2004 『ローマ皇帝群像 1』京都大学学術出版会
- スバルティアヌス他 (南川高志他訳) 2006 『ローマ皇帝群像 2』京都大学学術出版会
- ヨセフス (秦剛平訳) 2000 『ユダヤ古代誌 4』ちくま学芸文庫。
- ヨセフス (秦剛平訳) 2000 『ユダヤ古代誌 5』ちくま学芸文庫。
- ヨセフス (秦剛平訳) 2000 『ユダヤ古代誌 6』ちくま学芸文庫。
- ヨセフス (秦剛平訳) 2002 『ユダヤ戦記 1』ちくま学芸文庫。
- ヨセフス (秦剛平訳) 2002 『ユダヤ戦記 2』ちくま学芸文庫。
- ヨセフス (秦剛平訳) 2002 『ユダヤ戦記 3』ちくま学芸文庫。
- ヤディン, Y. (田丸徳善訳) 1975 『マサダ』山本書店。
- ヤディン, Y. (小川英雄訳) 1979 『バル・コボバ』山本書店。

江添 誠

慶應義塾大学大学院後期博士課程

Makoto EZOE

Keio University